

もこれもK氏の氣に入らなかつた。あるものは後期印象派の若い洋畫家のやうに、K氏の方に尻を向けて衝立つてゐた。また或るものは未來派のやうに顎を突き出して、この畫家に喧嘩腰でゐた。

「どうもいかん、みんな形が畫になつてゐない。」

K氏はぶつぶつ呟きながら川つ縁を下つて來ると、やつと二三本舞妓のやうな恰好をしたのが見つかつた。

「うむ、これならよかりさうだ。」

K氏は早速繪具箱をあけて寫生にかかつた。

K氏は毎日柳ばかりを寫生してゐるわけにもいかなかつた。畫家にも色々俗な用事はあるものだ。K氏は精々閑をこさへては、川つ縁へ出掛けて行つたが、格別急がうともしないで、のつそりとしてゐるので、その畫が出来上つたのは、寫生を始めてから丁度三十日ばかり経つてゐる頃だつた。

註文主は畫家の手からその油畫を受取つたが、ちらと畫面を見ると、そのまま黙つて押戻

した。

「先生、私がお頼みしましたのは、芽張柳の畫でしたな。」

「さうです、たしかに芽張柳でしたよ。」

「でも、先生、この畫は芽張柳でなくつて、青柳ですな。」

K氏は吃驚して自分の畫を覗き込んだ。成程柳はこんもりと葉が繁つてゐた。K氏が寫生にひまどつてゐる間に、柳の方では又しても畫家に相談なしで、勝手に葉を伸ばしてゐたのだつた。

## 奇 癖

小説家のH氏は今はどうか知らないが、以前もつと若かつた頃には、他家へ訪ねて行つての歸りに、門口の戸をがらつと明けて表へ出ると、その儘さつさと歸つて行つたもので、決



してその戸を締めておくやうな手数のかかる事はしなかつた。

「なんだつて君は門口の戸を締めないんだね。」

それを氣にして友達の一人が訊いた事があつた。するとH氏は答へた。

「門口の戸かい。あれは僕が出入りするのに、明けなければならぬから明けはするが、締める必要なんかちつともないぢやないか。」

むかし英吉利にH氏と同じ様な皮肉家にスキフトといふ作家があつた。家事一切は女中まかせで何一つ口を出さうとしなかつたが、唯一つの癖は戸の開閉あけたがおそろしく口やかましい事で、どんな場合にでも、これだけは嚴重にしないと、すぐに機嫌を悪くした。

ある時、女中の一人が、かなり遠い田舎町にゐる姉が結婚するので、是非その席へ顔出ししなければならぬから、一日だけお暇が許して貰ひたいと言ひ出した。主人のスキフトは直ぐに承知をした。

「それはめでたいの。ゆつくり行つて来るがいい。幸ひ乃公おれの馬もあいてるから、あれに乗つて行くとしたらどうぢや。馬丁ばちやうに案内して貰つての。」

「え、あの馬をお貸し下さいますか、それに馬丁さんまで……まあ、旦那様お有難うございます。」

女中は身體を折釘のやうにしてお禮を言つたが、そのまま主人の室を飛び出して、すぐに支度しどに懸つた。

馬の用意は出來た。女中は主人の背に跨がつたやうな氣持で馬に乗つた。そして家を出た。暫くすると、遙か後から呼びかけて来るものがあつた。女中も馬丁も馬も一緒にあとを振り返つた。追ひかけて來たのは下男しもおとこの一人で、旦那様の御用だから今一度邸へ歸つてくれといふのだ。女中はぶつぶつ呟つぶやきながら歸つて來た。そして膨ふくれつ面をして、主人の室へ入ると、スキフトはじろりと横目でにらんだ。

「その戸を締めて行きなさい。」

女中は馬に乗つて結婚式に出掛けられる嬉しさに、つい戸を締めるのを忘れてゐたのだ。



## 無學なお月様

N氏は奈良女子——の校長である。東京にゐる頃にはさうも思はなかつたが、住んでみると奈良は景色がよく、景色がよくないところには古蹟があつて、遊ぶには恰好な土地だなどN氏は思つた。それにつけても、かういふ結構な土地に来て、鹿のやうに柔和で、鹿のやうに尻尾の短い女學生を預つてゐる自分の身の幸福さを思ふらしかつた。

N氏は晚餐がすむと、毎晩のやうに奈良公園へ散歩に出た。ある晩の事、いつものやうに女子教育の事を考へながら（ニイチエだつたか、女をしつけるには鞭を忘れるなど言つたが、N氏は鞭らしいものを持つてゐなかつた。多分忘れてゐたのに相違ない。）公園のなかをぶらぶらしてゐた。すると、いつの間にか黛くろずんだ春日の杜に、のつそりと大きな月があがつてゐた。

「や、月が出てゐる。ちやうど十五夜だな。」

と、立ちどまつて果物皿のやうにまん圓く、おまけに果物皿のやうに冷いお月様を見てゐるうち、N氏はなんだか歌よみらしい氣になつた。

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

いい歌だ、いい歌が出来たものだと思つて、今一度よみかへしてみると、それは自分の歌ではなく、百人一首に出てゐる名高い安部仲麿の作だつた。

N氏はその歌を繰返しながら、じつと空を見てゐると、肝腎の果物皿のやうなお月様が三笠の山の上に出てゐない事に氣がついた。

「をかしいね。三笠の山に出でし月かもといふからには、ちやんと三笠山のでつぺんに出なければならん筈ぢやないか。それにあんな方角から出るなんて。」

實際N氏の立つてゐる所から見ると、月ほとんどない方角から出てゐた。三笠山は何か後暗い事でもしたやうに、黛くろずんだ春日の杜かげに圓い頭をすぼめて引つこんでゐた。



それから後といふもの、N氏は公園をぶらつく度に方々から、しきりと月の出を調べて見たが、無學なお月様は、仲麿の歌などに頓着なく、いつも外方そつぱうから果物皿のやうな圓い顔によつきりと覗のぞかせた。

「やつぱり間違ひだ。仲麿め、いい加減な茶羅つぽこを言つたのだな。」

N氏は自分のやうに眼はしの利く批評家に出合つたら、仲麿もみじめなものだと思つて得意さうに微笑した。そして會ふ人ごとにそれを話した。すると大抵の人は、

「なる程な。」

と言つて、感心したやうに首をふつた。

N氏に教へる。それは月が年がよつたので、月も年がよると變な事になるものなのだ。

### 詩人と百姓婆さん

ヘンリー・ヴァン・ダイクといへば、亞米利加では第一流の學者として、詩人として聞えてゐる老人である。去年だつたか娘をつれて日本へ遊びに來たが、その節日光を見た詩を或る社へ寄稿した事があつた。詩は取立てていふ程の立派な出來ではなかつたが、それでも亞米利加の詩としては巧うまいいと思つた。

その時は丁度、同じ亞米利加から實業家のヴァンダリップ一行が來て、盛んに日本人に歓迎されてゐた時なので、ヴァン・ダイクの事は一向世間の噂に上らなかつた。世間の噂に上らなかつたからといつて、馬鹿にするものではない。むかし政治家のグラッドストオンと詩人のテニスンとが連立つて、オックスフォード大學かどこかに講演に行つたことがあつた。その折グラッドストオンは、聴衆に向つて、自分の政治家としての仕事は派手なやうだが、すぐ世間からは忘れられる。テニスンの事業は地味だが、永久に残ると言つたものだ。グラッドストオンめ、煙草好きで、正直者で通つたこの詩人に、ちよつとお世辭を言つたのだらうが、それにしてもこのお世辭には眞理がある。(尤も永久に残るといつたところで、ただ残るといふだけでは、案外詰らないかも知れない。)



このヴァン・ダイクが、ある時南の方へ旅行した事があつた。その折この詩人は穢い百姓家の入口に、老いた一人の印度人の婆さんが、だらしなく蹲踞しゃぶんで、薄穢い粘土製のパイプを啜くはへて、すばすば煙草を喫してゐるのを見た。

「婆さん、お前煙草が大層好きだと見えるな。」ヴァン・ダイクはにこにこ笑顔を作つて、肩越しに婆さんを覗き込んだ。「だがそのパイプは少し穢過ぎるやうだな。」

婆さんは皺くちやな顔を上げて詩人を見た。

「旦那、穢いと言はつしやりますか。その筈だての、俺ら日がな一日すばすばやつてるのだからな。」

婆さんの呼吸は、詩人にとつて堪へられないほど煙草臭かつた。詩人は顔を顰めながら言つた。

「そんなに煙草が好きなのかい。だが、パイプだけはよく掃除しなくちや。さもないと口が臭くつていけない。」

「口が臭くたつて構はねえだ。」

婆さんは不機嫌さうに雞のやうに口を尖とがらした。

「でもさ、」詩人はお愛想ぶりに婆さんの肩を叩いた。「死んで天國へ行くのに、呼吸が臭くては困るぢやないか。」

「何を言はつしやるだ。」婆さんはてんで相手にしないやうにせせら笑つた。「俺ら死ぬる時には呼吸を引取りますだでの。」

ヴァン・ダイクはなんとも返事のしやうがなかつた。で、ステッキを振つて婆さんの傍を去つた。すべて負けた時には成るべくその場を外した方が結構である。

## 蝮の失敗

春が暖かくなるにつれて、蛇がそろそろ穴から這ひ出すやうになつた。今日は一つその蛇の失敗ばなしをここに披露する。



京都の某畫伯の數多い門弟のなかで、誰の眼にも一番光つて見える人にK氏といふのがあ  
る。K氏は實際えらい、畫も上手に描くのみならず、他の人が二本の足でする旅行をも、氏  
は平氣で一本足でするからである。

K氏は子供の時から足が悪かつた。で、坐つてゐて出来る仕事はなからうかと思ひついた  
のが繪の道である。もしか性來足うまれつきが達者だつたら、氏は畫かきにならなかつたかも知れ  
なかつた。だが、繪の方がだんだん巧くなつて來ると、氏は多くの畫かきのする寫生旅行と  
いふものが爲してみたくなつた。それには悪い足が邪魔になつた。で、氏は思ひきりよく、そ  
の悪い方の足を一本切つて捨てた。——世間には他人ひとのものだつたら、手だらうが、足だら  
うが、平氣で切つて捨てる醫者といふ職業人がゐる。

去年の事だつた。K氏は義足をつけて、同門の人達と一緒に日本アルプスへ寫生旅行に立  
つた。いよいよ山にかかると、仲間足弱のK氏に構つてゐなかつた。彼等は山へ寫生に來  
たのである。もつと眞實の事を言ふと、文展向きの繪になる景色を捜しに來たのである。だ  
が、困つた事には神様が山をお拵こしらへになつた時には、まだ文展といふものが無かつたので、

山にはそんな用意はすつかり缺けてゐた。で、畫かき達はK氏を置いてきぼりにしてぐんぐ  
ん奥へ入つて行つた。丁度文展でいつもK氏に置いてきぼりを喰はされたやうに。

K氏は義足を曳きすりながら、よちよち後から登つて行つた。うしろには強力がついてゐ  
た。ごろた石の多い岨道そまぢへ來ると、熊笹の陰からいきなり飛び出して來たものがある。あつ  
と言ふ間にK氏の片足へ噛みついて、そのまま電光のやうに消えてしまつた。

「や、蝮まむしだ。旦那やられましたな。」強力は顔色を變へて飛んで來た。「早く手當をなさらな  
ければ……」

「なに、構はない。」K氏は平氣で歩みを續けた。「馬鹿な蝮まむしだよ。俺の體が不死身だつてえ  
事にちつとも氣がつかないんだね。」

「でも、旦那、相手は蝮まむしですからね。」

強力は胡散うさんさうな眼をして、後から氣をつけて畫かきの容子を見てゐたが、畫かきの足は  
少しも痺しびれたらしい風は見えなかつた。

蝮の馬鹿め、つい見さかひもなくK氏の義足の方へ噛みついたのだつた。



## 王様と上布

伊太利の王イマニユエルが或る時、旅の途すがら名もない田舎町に泊つたことがあつた。町の人は名高い王様のお成りだといふので、わざわざ心をこめてとんちんかんなおもてなしをして、王の御機嫌をとつた。

まづい食事がすむと、王は眠るより外に仕方がなかつた。王は寢床にはひつた。寢床は粗末な拵へだつたが、上布だけは新しい、おろしたての雪のやうに眞白な布だつた。王は木の片きれが何ぞのやうに無造作に、そのなかに體を横たへた。

王は幾度か寢がへりを打つた。寢ぐるしい晩で、王は國の事や、皇后きさきの事や、馬の事などを考へるともなく考へた。やがて何事も判らなくなつた。王はやつと寢つくことが出来たのだ。すると、だしぬけに室の入口の扉をとんとんと敲く音がした。

イスニユエル王は子供のやうに睡さうな顔を、半分ばかり寢床から持上げて見た。入つて来たのは宿の亭主で、胸には折目のついた清潔な上布を大事さうに抱へてゐた。

「王様、お邪魔をして相済みませんが、ちよつと上布を取替へさせていただきますと存じます。」

亭主は叮嚀にお辭儀をした。

「上布か。上布だと新しいやうだが……」

王は重い臉をこすりながら、やつとこさで寢床から起きた。亭主は手早く上布を敷きかへてさがつた。

王は轉げ込むやうにその上に横になつた。そして毀れた玩具のやうにだらりと手足を投げ出したかと思ふと、そのまま、またすやすやと睡つた。

物の一時間も経つと、王の室の扉がまたとんと鳴つてゐるので目がさめた。

暫くすると以前のやうに眞白な上布を胸にかかへた亭主が、幽靈のやうに足音も立てないで、そつと入つて来た。



「王様、毎度恐れ入りますが、また上布を取替へさせていただきたいと存じまして。」  
 「上布だと。やつと今取替へたばかりではないか。」

王は呟いた。

「でも、汚れてゐては失禮でございますから。」

亭主は王が起き上ると、手早く上布を取替へた。

「なぜまた、そんなに度々上布を取替へるのか。」

王はいくらか不機嫌らしく訊いた。

「はい、この邊の下世話に、上布は自分のためには七日目に、お友達にはその日その日にと  
 言ひますから、王様には一時間ごとにお取替へしなければと存じまして。」

### 名挨拶二つ

アメリカの上院議員の某<sup>たがし</sup>が、女房を連れてバルチモアへ遊びに出掛けた事があつた。女  
 房は名高い女権論者だつたから、いくら自分の亭主だつて、「連れて」と言はれると膨れ面  
 をするかも知れないから、そんな折のために「一緒に行つた」と言ひ直して置く事にする。

二人は日が暮れて、ワシントン市に歸つて來た。家に着くと、女房は何か忘れ物でもした  
 らしく、そこらをうろうそを捜しまはつてゐたが、急に主人の方へ振向いて訊いた。

「あなた、わたしの蝙蝠傘<sup>バトラーン</sup>はどうなすつたの。」

「蝙蝠傘？ 知らないよ、そんな物。」

と、主人は蝙蝠傘といふ物の存在を知らないやうな調子で言つた。

「まあ、驚いた。さつき汽車の中であなたにお渡ししたぢやないの。」

「さうさう、そんな事があつたつけないあ。」と、主人は獨立戦争時分の事でも思ひ出す折の  
 やうに、額に手をあてがつた。「なるほど蝙蝠傘は確かに俺があづかつたよ。」

「ぢや、どうなすつたの。」

主人は上着を脱ぎさしたまま考へ込んだ。



「困つたな。して見ると、汽車の中へ忘れたかも知れないぞ。」

「まあ、汽車の中へ。」女房は肩を聳かした。

「どうもさうらしいよ。」

「よくそんな事が言へますね。」と女は大聲でわめき出した。「あなたは上院議員ぢやなくつて。婦人の蝙蝠傘一つ始末が出来ないものが、よく國政が料理していただけますね。」

主人はかうきめつけられて、ぐうの音も出ず、失くなつた蝙蝠傘のやうに、眞直ぐに衝立つてぶるぶる顫へてゐた。

クレオパトラやマクベス夫人に扮して名を賣つた英吉利の女優ランドトリ夫人が、まだ若盛りの頃、ある宴會で、その頃ちやうど倫敦を訪れて來た阿弗利加の或る王様と一緒になつたことがあつた。

女優は焼栗のやうに色の黒い王様の御機嫌を取らうとして、いろんな愛嬌を振撒いた。王様はすつかり上機嫌になつて、にこにこしてゐたが、歸り際に大きな手を出して可愛らしい

女優の手を握つた。そして精一杯のお愛想をぶちまけた。

「夫人、もしか貴女のお顔の色がもつと黒くて、そしてもつと肥えていらつしたら、私あなたの爲に自分の國をも投げ出すですがね。」

## 世界一の名醫

北京に住んでゐる或る亞米利加人が、支那人を相手に、

「お國も悪くはないが、唯病氣の時だけには困つちまふ。信用の出来るいいお醫者がゐませんからね。」

と、しみじみ閉口したやうにこぼした事があつた。すると、支那人はむきになつて雀のやうに唇を尖らせた。

「いいお醫者ですつて。いい醫者なら支那に無い事はありません。恐らく世界ぢゆうで、一



番いい醫者がゐるのは支那でせう。韓璋<sup>ハンチャン</sup>つて、あなたも御存じでせう。あの人もいいお醫者の一人ですよ。私には生命の恩人ですからね。」

「ほう、生命の恩人だとおつしやるか。」

件の亞米利加人は、支那に生命といふものが唯の一つでもあるのを、そのまた生命を弄らうといふお醫者があるのを不思議でならないやうに言つた。

「診断でも上手なんですかい。」

「いや、理由を言ふとかうなんです。いつだつたか私がひどく加減を悪くした事がありましたね。」支那人は話し出した。「私は早速懇意な洪庚<sup>ホンゴン</sup>といふ醫者を迎へにやりました。洪さんは薬をくれました。私はそれを飲むと、加減がなほ悪くなりました。で、宋森<sup>ソンセン</sup>といふ他の醫者をまた迎へました。宋さんはもつとどつさり薬の分量を飲ませましたが、病氣は悪くなる一方で、私はもうこれが自分の最後だとあきらめました。で、駄目だとは思ひましたが、その韓璋<sup>ハンチャン</sup>さんを招んで貰ひました。韓さんはそんなだつたら乃公が行つても、もう駄目だらうからつて、來てはくれませんでした。お蔭で私は生命拾ひをしました。」

「なるほど、名醫だ、名醫だ。これが名醫でなくてなんだらう。」  
と、亞米利加人は泣き出しさうな顔をして笑ひつづけた。

### 書肆と作家

米國のカリフォルニア州にさる本屋がある。小説家ウキンストン・チャーチルがひどく好きで、お客が何か小説本の面白いのが有るかと訊くと、

「ございますとも。チャーチル先生の新版物で、無類飛切といふのがございませう。」

と、すぐにこの作家の小説を賣りつけようとする。で、數ある本屋のなかで、チャーチル物の賣高にかけては、いつの月も記録<sup>レコード</sup>を取つてゐるのはこの本屋だ。

ある時チャーチルがカリフォルニアに旅行をした事があつた。小説家の友人は、この機會を外さないで、作家と本屋とを結びつけようと考へたので、豫めその由を通じると、本屋は



雀のやうに羽搏きをして喜んだ。

「結構ですな。かねて崇拜してゐる先生にお目に懸るなんて。だから本屋商賣は止められませんのさ。」

本屋は、お愛想のつもりで、チャーチルの作物は何一つ残さず讀んだ、なかには十回も繰返したのがあると言つて附足した。

本屋は小説家に紹介せられた。チャーチルはにこにこ顔で本屋の手を握つた。

「——君に聞きますと、大層私のものが好きださうで、大きに有難う。」

「いえ、どう仕りました。……」

本屋はかう言つたきり、あとの言葉も繼がないで、じつとチャーチルの顔を見つめたままぼんやりしてゐた。小説家はいくらか手持無沙汰な思ひをしたらしかつた。

チャーチルを宿屋に送り込んだ紹介人は、歸りに本屋の店を覗いてみた。本屋は椅子に凭れて籠のカナリヤを逃したやうな、浮かぬ顔をしてゐた。

「どうだ、愉快だつたかね、先生に會つて。」

「いや、はや。」と本屋は紹介人の聲を聞くと、椅子から立ち上つて來た。「チャーチル先生つて、あんな顔をしてる方なんですか。ほんたうに失望しましたよ。結局お會ひ申さなかつた方がどれ程よかつたでせう。」

困つた事には、本屋はそれ以後あまりチャーチル物を賣らうとしなくなつたさうだ。

## 夏蜜柑

日本の宴會には、よくお客同士の餘興盡しといつたやうなことがあつて、それあるがために自分の隠し藝を、人前に押賣りをする事の出来る楽しみもあるが、どうかすると、自分が藝無しのためにとんだ恥をかかされることがよくある。亡くなつた山路愛山が、ある時何かの宴會で相客からうるさく隠し藝をせがまれて、例の負け嫌ひから、丁度夏座敷だつたので女中に臺所から冷し素麵の桶を持ち込ませて、それをいきなり頭からひつかぶつて、素麵の



雨の中から鷺鳥のやうな苦しい聲を振絞つて、

「これは鯉の瀧のぼりでござい。」

と言つたさうだが、お蔭で座敷は水だらけになつて、一座は白けてしまつたさうだ。

最近日佛交換展覽會の用事をすませて、佛蘭西から歸つて來た美術批評家のK氏が、まだ若盛りで、白馬會の仲間達と一緒にしやぎまはつてゐた頃、こんなことがあつた。それも宴會での出來事だつた。

K氏は人も知つてゐる通り口が大きく頤が突つ張つて、俗に言ふえらの出た顔で、あんどり口を開いたら、中判の佛語辭典でも詰め込めさうな大きさである。宴會の藝づくしは廻り廻つてK氏の番になつた。氏はやをら座を立つて座敷の眞中に坐つた。そしてポケットから大きな夏蜜柑を一つ取出して掌に載せた。

「お目通りがかなひましたら、これから、この夏蜜柑を丸ごと口のなかに頬張つて御覽に入れます。」

かう言つて、K氏は件の夏蜜柑をそろそろ口の中に押込みかけた。皆はをかしさに手を拍

つて笑ひ興じた。K氏の口も大きかつたが、夏蜜柑はそれよりもまだ大きかつたので、七分がた口の中にはひりははひつたが、残りの三分がまだ齒の外にはみ出してゐた。

「もつとしつかりやつてくれ。まだ半分ばかり残つとるぢやないか。」

誰かが冗談半分に傍から喚いたものだ。すると、酔つたまぎれのK氏は、いきなり拇指をもつて蜜柑をむりやりに口の中に押込んでしまつた。

「あざやかだ。あざやかだ。」

皆がやんやと褒めそやすと、それにつれてK氏は二三度手をふつて踊るやうな眞似をしたが、急に息づまりさうになつたと見えて、両手の指先を口の中に突込んで蜜柑を取出さうとするらしかつたが、口一ぱいに嵌はまつた蜜柑はどうしても取出しやうがなかつた。見てゐるうちに、K氏の顔は眞青になつた。額からは汗がたらたらと流れた。鼻は轡ふいてのやうに激しい息を吐いた。皆はうろたへ出した。

「駄目だ。駄目だ。前齒をすつかり抜かなくちや駄目だよ。」

「背中を金槌でどやしついたら、一息に吐き出さないかしら。」



「こりやとても駄目だ、助かりつこはない。早く親類にでも知らせてやらなくちや。」  
 こんな風な言葉が邊りから取交はされた。K氏の眼からは涙が流れた。鼻からは涙はなみが流れた。口からは涎が流れた。美術批評家の最期は、こんなに惨めで、こんなに滑稽なものかと思はれた。すると、今まで黙つて見てゐた智者のM氏がついと立ち上つたと思ふと、ポケットから鉛筆削りの小刀ナイフを取出して、いきなりK氏の口の中に突込んだ。

「危ない。何をする。」

「かうするんだ。」

M氏は外科醫のやうに落着き拂つた態度で、夏蜜柑の肉を切り取つてそれをK氏の口から引張り出した。こんな事を二三度するうち、口の中がやつとゆとりがつくやうになつた。K氏は指を突込んで残つた夏蜜柑の臟腑をやつとこさで引出すことが出来た。

お蔭で生命だけは取留めた。それ以來K氏は夏蜜柑の顔を見ると、急に蟲がかぶるやうに顔を眞青にした。

## 器用な言葉の洒落

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃古今傳授を受けたたつた一人の男は彼だつたといふので、歌の方の造詣もほぼ察することができよう。茶も上手で、とりわけ料理がうまかつた。この方では相當うぬぼれを持つてゐた利休なども、幽齋の前にはちよつと頭があがらなかつたらしく、ある時などはわざわざ頼んで、鶴の料理のお手前を拜見に行つたことがあつた。

幽齋が頓才があつて、歌の詠み口などがしやれてゐて、おまけに早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連立つて烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顔を揃へてゐるのを見て、

「細川二つちよつと出にけり」



と言つて、ちよつかいを出した。すると、幽齋は即座に、  
「御所車通りしあとに時雨して」

とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇乞ひをして歸らうとすると、烏丸殿はわざわざ玄關まで見送つて出たが、こつそり家來の一人に耳打ちをして、だしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突き倒させた。(おそろしく近代的なお公家さまで、歌よみを優遇するよりも苛めることを知つてゐる。)そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まごまごしてゐる間に、

「細川殿、たつた今一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。すると、幽齋は腰を摩り摩り起きあがりざま、

「とんと突くころりと轉ぶ幽齋が、いつの間よりか歌をよむべき」

とうたつたので、悪戯好きなお公家さんも手を拍つて嘆賞した。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、どうぞ歌一首のうちに「ひ」の字を十入れて作つてみてくれと、難題を言ひ出した。幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやう

なことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

「日の本の肥後の火川の火打石日にひとふた拾ふ人人」

と詠んでみせた。大名は懲りずにまたまた難題を出して、今度は歌一首のなかに「木」を十本詠み込んでみせてくれとの事だつた。箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の造作もなく、

「かならずと契りし君が來まさぬに強て待つ夜の過ぎ行くは憂し」

と、有合せの檜ひのと椽とちと桐とちと樺しきみと柿しきみと椎しきみと松と杉と柚と桑とを詠み込んで見せたものだ。

歌の話が出たから、これは幽齋のではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑が、ある時、さる公家を訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃えらい發明をした、それは歌のどんな上の句にでもくつつけることの出来る下の句だと、出来ることから農商務省に願ひ出で、專賣特許でも取つておきたいやうなことを言ひ出した。宗鑑がどんな句だと訊くと、公家は自慢さうに、

「といふ歌はむかしなりけり」

といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺しわをよせて笑つた。



「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

と言つて「それにつけても金の欲しさよ」といふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自分の知つてゐる古今集や百人一首の色んな歌にくつつけてみたところが、妙な事には、この下の句はどの歌にもよくついて、少しも縫目が見えなかつた。「……それにつけても金の欲しさよ」

實際よくつくと思はれたのに不思議はなかつた。その公家は、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。

今一つそんな話をつけ足させてもらはう。——こなひだの歐洲戦役の當時、ある英國の軍醫が、アメリカの野戦病院を見舞つたものだ。すると、泣き面やしかめ面の病人たちのなかにたつた一人、機嫌よささうににこにこ顔で病床に横たはつてゐる一人の年若な傷病兵が眼についた。傷はかなり重いらしかつた。

「何か御用はないかな、あつたら何でも伺ふよ。」

軍醫は患者の顔を覗き込むやうにして言つた。

「有難う。是非伺ひたいことがあるんですが、……」傷病兵は相變らずににこしながら言つた。「あなたならきつと教へて下さるでせうよ。」

「伺はうぢやないか。言つて御覽。」軍醫は短い口髯を引張つた。それを横目に見ながら、病人は口ばやに次のやうにまくし立てた。

“Well, doctor, when one doctor doctors another doctor, does the doctor doing the doctoring doctor the other doctor like the doctor wants to be doctored, or does the doctor doing the doctoring doctor the other doctor like the doctor doing the doctoring wants to doctor him?”

### 當世批評家氣質



東京の或る雑誌に美術記者を勤めてゐて、かなり評判のいい男がある。去年の秋の文部省展覧會に京都派の大家T氏の「河口」といふ作品を見た時、この美術批評家はちよつとその繪の前で立ちどまつたが、

「かなり器用に描けてるな。だが、器用だけでは仕方がない。」  
と、獨言を言ひながら、さつさと通り過ぎて行つた。

その後、この「河口」の評判が世間にやかましく言ひ囃されるやうになると、件の批評家は急にうろたへ出した。

「こんな筈ぢやなかつた。すると、俺が何處か見落したのぢやあるまいかな。」

美術批評家は慌ててまた文展の門を潜つた。そして「河口」の前に立つて目を光らせた。不思議な事には、以前見た折には、器用でばかり出来てゐると思はれた繪が、今度はすっかり興味で出来てゐるらしく思はれ出した。

「巧い。ほんたうに巧いものだ。」批評家は馬の値ぶみをする折のやうに少し離れて畫面を見たりした。「第一小松がよく描けてゐるし、それに波の調子がなんとも言へない。」

批評家はそれからといふもの、毎日のやうに「河口」の前に立つた。見れば見る程いいはこの繪の出来だつた。

「うまい。いつ見てもうまい。呉春だつて迎もかなひつことはない。」

批評家は街頭で友達に出合つても、自宅で妻の顔を見ても、すぐこの繪の話をした。

彼はこんなにまでして「河口」の評判を立てたが、たつた一つ、ぢかに作者に出合つて、この話をしないのが残念で堪らなかつた。で、思ひ立つて京都にやつて来てT氏に會つてみる事にした。

T氏は都合よく家にゐた。美術批評家はこの作者の前に坐つて、魚のやうに口さきを尖らせて「河口」を賞めそやした。T氏はいくらか擦つたさうな顔つきをして、それを聽いてゐたが、批評家のお喋りがすむと、靜かに口を開いた。

「お褒めにあづかつて有難いが、實は自分ではあの作をそんなにいいものとは思つてゐません。例の小松ですな、あの小松をもう五分ばかり左の方に寄せると、全體の感じがすつかり違つて来て、もつとよくなるかも知れませんが……」



「へえ、小松を五分ばかり左へ……」

批評家はそんな事になると、自分の立場がすっかりなくなつてしまふのに気がついて、わけになつて反對した。そしてどうしても小松を動かさなければならぬなら、右の方へ一寸ばかり動かしてほしいと言ひ出した。

「批評の獨立だ。」批評家は肚の中でかう言ひながら、別れを告げた。

### 大名の駄洒落

ついこなひだのこと、侯爵H氏のところへ若い畫家五六人が饗ばれて行つたことがあつた。

H氏は九州で聞えた五十四萬石の城主である。

ひとしきり酒がまはると、侯爵は、蕃茄トマトのやうな眞赤な額をてらてらせながら、上機嫌で皆の顔を見比べた。

「さあ、これから大いに談じよう。誰か面白い世間話をして聞かせて呉れんかな。」

「ぢや皮切りに私がお話しませう。」

かう言つて、髪の毛が長く額に垂れかかつたのをうるささうにかき上げながら、顔を持上げたのは、仲間で一番年若で、おまけに沈黙家ちんもくかで評判の高いOといふ畫家だつた。

「O君、君がお話をするなんて、ずるぶん珍しいな。何の話だい。」

皆はからかひ半分にO氏の顔を見た。

「龜の話さ。」

O氏はむつとしたやうに言つた。

「龜の話はいいね。」

皆は顔を見合はせて笑つた。

「麻布の或る家にお婆さんがゐましてね、それが龜を一つ飼つてゐました。……」

O氏はしんみりした調子で話の緒口を切つた。それによると、婆さんは二十年近くもの間自分の娘同様に龜をいたはつて大事にかけてゐた。龜の方でもまたすつかり婆さんに馴染ん



で、婆さんが池の縁へ出て来てその名前を呼ぶと、龜は親切な自分の飼主の御機嫌を伺ふやうに、ひよつくり水へ浮き上つて、じつと婆さんの顔色を見入つたものだ。ところが、この頃になつて、婆さんは家の都合で牛込邊へ移轉しなければならなくなつた。悲しいことには移轉先には龜を飼ふやうな池がないのである。

「池がないのでね……」

○氏はまるで自分の家に池がないかのやうに、ほつと溜息をついた。

「池がなかつたら、盥でも足りるぢやないか。」

誰かが横つちよから口を出した。すると○氏はむつとして、

「婆さんは盥なんかで龜を飼はうとは思つてゐない。婆さんは龜の自由を尊重してゐるんだ。」

と、きめつけるやうに言つた。居合はせた若い畫家達は、これまで婦人に對するのと同じやうに、龜の自由をも尊重してゐなかつたので、急にその龜のやうに首をすくめたが、五十四萬石の大手H侯ばかりは泰然としてゐた。○氏はまた話し出した。

で、婆さんは誰かほんたうに龜を可愛がつて呉れる者で、家になりな池を持つてゐる者があつたら、龜を譲りたいものだと言ふ方々聞き合はせてゐるが、今時そんな人は見つかやうがないので、移轉を目の前に控へてゐる昨日今日、龜のことにかまけて何も手がつかないでゐるといふのだ。

「こりや面白い、面白い話だね。」

皆は口を揃へて言つた。暫くするとそのなかの一人が、

「○君、君は婆さんが名前を呼ぶと、龜がひよつくり顔を出すと云つたな。」

「うむ、言つたよ。」

「一たいどう言つてその龜を呼ぶのかね。」

「さあ、どう言つて呼ぶのか……」○氏は髪の毛の長い頭を引抱へて、苦笑にがわらひをした。「その邊は僕もよく聞かなかつたがね。」

「そんなことは聞かなくともよくわかつとるぢやないか。」

といふ聲がした。それは誰でもない、五十四萬石の城主H侯だつた。



「ぢや、なんといつて呼ぶのですか。」

「それはかうさ……」H侯は聲にちよつと調子をつけながら言つた。

「それはかうさ——」

もしもし龜よ

龜さんよ……」

### 宰相と馬鹿者

自分達の二番目の戀人が誰だつたかを思ひ出せない人達も、ナポレオンの二番目の皇后が  
墺太利帝の皇女マリア・ルイザであつたのは知つてゐる筈だ。何故といつて、この世の中に  
は、帝王の事だつたら、どんな些細な事でも、きつと記録に書き残す歴史家といふ筆まめな  
輩が住んでゐるから。

ナポレオンがその皇女ルイザと結婚して間もなく、墺太利政府の當局者が、何か政策上の  
事で、この英雄の意見とひどく異つた處置を取つた事があつた。その報せがナポレオンの耳  
に入ると、この色の白い洒落者の小男は櫻んぼのやうに眞赤になつて怒つた。そして、

「墺太利皇帝は、老ぼれの馬鹿者だな。」  
と、口穢く言つたものだ。

ナポレオンの聲はかなり大きかつたが、墺太利までは聞えなかつた。だが、卓子の向う側  
には皇女ルイザが腰かけて何か讀んでゐた。ルイザは顔をあげて良人の方を振向いた。

「あ、吃驚した、何をおつしやつたの。お父様がガナツシュですつて？ ガナツシュつてど  
んな事なの、ねえ、あなた……」

ルイザは生れて初めてのこの佛蘭西語の意味を訊きただした。

ナポレオンははたと當惑した。

「ガナツシュかい。さあ、なんと譯したもんだらうね。まあ一口に言ふと、經驗にも富んで  
考への深い人の事をいふんだ。」



ごまかし上手のこの英雄は、をかしさを噛み殺しながら、こんな事を言った。

「さう、ガナツシュつてそんな事なんですの。いい言葉ですわね。」

皇后は幾度か口のなかでその言葉を繰返したらしかつた。

その翌朝、宰相が皇后に謁見したことがあつた。すると、皇后は小鳥のやうな可愛らしい口元をして、

「宰相は吾が國で一番えらいガナツシュですね。」

と挨拶をしたものだ。宰相は絞め殺されでもするやうに、眼を白黒させてゐたが、暫くしてから

「は、恐れ入ります。」

と、心から恐縮して下つて行つた。

ナポレオンは後でこの話を聞いて、腹をかかへて笑つた。宰相も機嫌を直して笑つたが、ルイザめ、事によつたら何もかも辨<sup>わ</sup>へてゐて、こんないたづらをしたのかも知れなかつた。

### 男と女との胸釦の相違

今度は一ついつもとは變つて、小話を書き集めてみる事にする。——西洋の習慣で男の外套は左から右へ合はせるのに、女のはそれと反對に右から左へ合はせる事になつてゐるが、その理由を知つてゐる人は多く有るまい。博識家めいた言ひぶりだが、吾々の祖先は今の婦人と同じやうな着方をしてゐたもので、いつも獸<sup>けもの</sup>の皮にばかりくるまつてゐた彼等は、毛皮の襟を合はせるのに左手で右側を引張るから、自然右手で針留めを刺さなければならなかつた。猶太<sup>ユダヤ</sup>の坊さんはいまだにこの古式の習慣を傳へて、婦人と同じやうに右から左へ襟を合はせてゐる。人間の歴史がだんだん狩獵時代より進んで種族と種族との競争が激しくなり、戦人が必要になるにつれて、左脇にさした劍を抜くのに、これまで通りの着方では、外套の裾が邪魔になるので、男子はすべて今のやうに左から右に合はせることになつたのである。



そんな心配のない婦人は、今にむかしの型をそのまま右から左へ襟を合はせてゐる。婦人が人と争ふのに、劍の代りに舌を使つたのはすばらしい發明であるが、その故で彼等は襟釦のとめどころを變へる必要がなくなつた。

どこの家でも、主人が家庭にばかり閉ぢ籠つてゐると、女房の多くはすべてそれを物足りなく思つて、どうかして亭主を糶穀か何ぞのやうに門口から外に掃き出す工夫はないものかと、ついそんな事までも考へ出すものだ。著述家や學者のやうにいつも書齋にばかり引込んでゐる輩が、女房に好かれないのは、大抵かうした理由によるものである。發明家のエディソンも結婚後いつも家にはかり閉ぢ籠つてゐたので、花嫁の機嫌を悪くしたことがあつた。花嫁はエディソンの友達を訪ねて、何かの會合があつたら主人を誘ひ出してくれるやうにと頼んだ。友達は承知した。エディソンはその翌晩或る會に誘ひ出されたが、騒々しい人なかを好かない性なので、客間に入ると、すぐに片隅に置いてあつた椅子にもたれて、何か考へ事をしてゐるらしかつた。陽氣な友達は發明家の事などはつい忘れてしまつて、若い女を相

手に世間話に夢中になつてゐた。時が経つてやつと忘れものに氣がついた友達は、慌てて四邊を見まはした。するとエディソンは、先刻と同じやうに室の片隅にある椅子にもたれたままで、じつと頭を抱へてゐた。友達は歩みよつた。そして頭痛でもするのかと訊いた。發明家は溜息をつきながら、退屈さうに言つた。

「せめて犬でも一匹ゐてくれるといひんだが……」

アイランド

愛蘭の詩人イエエツは氣分ほど大切なものはない、歴史上の大事件でも煎じつめると、ふとした人間の氣分一つに基づいてゐるのを見つけることが少なくないと言つてゐるが、實際さうで、むかし韃靼人と波斯人とが幾年もにわたつて大戦争をした事があつた。その原因をよく調べてみると、韃靼人が、波斯人は口髭をよく手入れしないから薄穢いと言つたからの事で、波斯人に髭でもなかつたら、あんな恐しい戦争は起らなかつた筈である。夫婦喧嘩なども全くさうで、誰だつたかの言葉にこんなのがある。——飯さへうまく食べさせてくれたら、まあ大抵のことは辛抱してもいいと。



## 自分の葬式を自分の歌で

英國の詩人ジョン・キーツは、死ぬる間に友達に向つて、自分の墓には「ゆく水に名を書きし人ここに眠る」とだけ書いてくれと遺言した。こなひだ亡くなつた鷗外森林太郎氏は、墓には何も誌さないで、唯「森林太郎墓」とだけ書いてくれ、忘れても墓の字の上に「之」を書き入れるのではない。文字は中村不折氏に頼むやうにと言ひ遺したさうだが、音楽家が楽器を氣にするやうに、文字の遣ひ方にひどく神経質だつた人だけに、死ぬる間際にも「之」の字一つが氣になつてならなかつたものらしい。この頃アメリカの新聞で見ると、紐育に住んでゐる或る男は、自分が大病に罹つて、もう逆も助からないと氣がつくと、寢床に横たはりながら大きな聲でお葬式の讚美歌をうたつたものだ。そしてそれをレコードに取つて、自分の葬式には何も要らないから、ただこのレコードだけをかけて、その讚美歌のなかに儀式

を濟ませてくれと遺言して亡くなつた。葬式は遺言通りに自分のうたふ讚美歌で自分を葬ることになつたさうだが、鷗外氏もいつそのこと、自分で自分の墓碑を書き残しておけばよかつたのに。

名高い京都の陶工青木木米は、自分の職業柄日本はいふに及ばず、支那南蠻の物まで、良土といはれてゐる土は大抵集めてゐたさうだが、いつも冗談まじりに、

「わしが亡くなつたら、どうかあの倉のなかにある方々の土を賀茂川の水で捏ねて、その中へわしの死骸を入れて、一つ土團子をこしらへてくれ。そしてそれを三日三夜粟田よさおはたの窯かまで焼いた上、京の北山の中に埋めて貰へば、外に何も思ひ残すことはないわさ。」

と、言ひ言ひしたもので、聞かされた人達もそれは面白からうと言つて笑つたものさうだが、さてほんたうに亡くなつてみれば、陶工とは言ひ條、まさか死骸を土と一緒に捏ねるわけにもいかないで、葬式は世間並にしてすませたさうだ。



## 滑稽作家の諧謔

滑稽作家マアク・トエンが、いつだったか英國通ひの汽船に乗込んで、その喫煙室ですばやつてゐた事があつた。室一杯に溢れた白い煙の中には、いろんな顔が見えて、しきりと何か話し合つてゐるらしかつた。作家は聞くともしに耳を傾けると、皆は萬一この船が航海の途中で火事でも起すやうなことがあつたなら、どうして助かつたものだらうかといふことをしきりと話し合つてゐるのだつた。それを聞くと、この滑稽作家が持前の悪戯つ氣はむくむくと頭を上げかかつた。作家は一膝乗り出した。

「皆さん、承ると火事のお話らしいが、火事といへば、私にはずつと以前の手柄談が、つい昨日でもあつたことのやうに思ひ出されます。それは丁度私が泊つてゐた或るホテルの火事です。……」

マアク・トエンはかう言ひさして、ちよつと葉巻を口にあてた。皆は黙つてこの話上手の顔を見た。

「何分夜のことでしたから火脚はかなり速く、皆が火事だと氣づいた頃には、ホテルはもう一面火に包まれてゐました。見ると、第四階の露臺に老人が一人煙に包まれて立つてゐるぢやありませんか。ああ、老人がゐる。四階目の露臺に老人が一人残つてゐる。どうかして助けてやらなくつちやと、口々に我鳴りたてるが、誰一人どうしていいかは解らないのです。梯子といつたところで、とてもとどきやうがないし、皆はあれあれと言ふばかりで、じつと火の行方を見つめてゐました……」

「恐いことだ。人の焼け死ぬるのを見てるなんて……」  
頭の禿げた銀行家らしい男は、唸るやうに言つた。

「全く恐いことでした……」滑稽作家はその男の頭を見ながら、お愛想のやうに一つ頷いて見せた。「ところがその一刹那、私の頭に或る考いなきまへが電光のやうにひらめきました。

『繩をくれ、繩を……』



私はかう叫びました。誰だか長い縄を持つて来てくれたので、私はその端つぽを手に握りながら、非常な力でもつて縄の片端を老人に投げつけました。老人はうまくその縄にとりつきました。

『その縄でお前さんの腰を縛るんだ。』

かう私が下から呶鳴ると、老人は教へられた通りに腰を縛りました。それを見すまして私は力一杯に老人を四階の露臺から下に引きずり落しました。お蔭で老人は助かりました。「皆は安心したやうに吐息をついた。なかには何かひそひそと小聲で囁くものもあつたが、滑稽作家はこの様子を見て、つと立ち上つて、煙の中から次の室に逃げ出して行つた。」

### 小話數則

歐洲大戦役當時米國の應募兵のなかに、腦の後頭部が削ぎ取られたやうに凹んだ頭をした

兵卒が一人あつた。軍醫は物珍しさうに指先でそこを弄り廻して、いろんな事を訊いてゐたが、それだけではどうも腑に落ちないので、最後にこんな事を言つて訊いた。

「お前結婚してるのかい。女に溺れ過ぎると、偶に頭がこんな恰好になるのがあるが。」

「いえ、結婚などしてやしません。」兵卒は答へた。「旦那、そこは驢馬に蹴られた痕なんぞ

よ。」

驢馬と女——うまい事を言つたもので、兵卒にしては少し出来すぎた返辭である。

歐洲大戦の休戦が十一月十一日の十一時に成立つたといふので、ある御幣擔ぎは、この十一といふ數を何か特別のものやうに縁起を擔ぎ出した。で、早速舊約全書の第十一卷にある「列王紀略」上卷の十一章の十一行目を披いてみた。すると聖書にはかうあつた。

「此の事爾にありしに因る、また汝わが契約をわが爾に命じたる法憲を守らざりしによりて、我必ず爾より國を裂きはなして、これを爾の臣僕に與ふべし」

してみると、獨逸が共和國になるのはきまつた事實なので、ちやんと聖書に豫言してあつ



たのだと言つてゐる。

歐羅巴の戦線に派遣せられた米國の軍隊に、牛乳配達夫の召集せられたのが一人交つてゐた。その男が最近郷里の女房宛に寄せた手紙には、次のやうな文句があつた。

「僕は軍隊生活が好きになつた。實際大抵の事は辛抱するが、たつた一つ朝五時半までも寢床のなかに入つてゐなければならぬのだけはうんざりする。」

政府は近々小包郵便の料金を變へるさうだが、一八四五年米國政府が、普通郵便物の料金を三百哩までは五仙、それ以上は十仙に規則を改めた事があつた。すると郵稅收入がうんと減つて來たので、その筋では今更のやうに驚いた事實があつた。人間といふ奴は、郵稅が高くなると、すぐ御無沙汰をする事を知つてゐる。

亞米利加の西部にある或る日曜學校で、教師が嚴つべらしく訊いた事があつた。

「嘘とはどんな事です、皆さん知つてゐますか。」

一人のこましやくれた女の子が直ぐ立ち上つた。

「神様にはお叱りを受けるかも知れませんが、人間が困つた時には觀面に効力がある事なんです。」

## 子 供

故人ルウズヴェルトの澤山ある子供の一人が——誰だつたか名前はちよつと思ひ出せないが——幼い頃公園の木陰で下方しもさまの身なりの穢い子供達と一緒に遊んでゐた事があつた。

すると、そこを孔雀のやうにめかし込んで一人の婦人が通りかかつた。婦人はちらと子供の顔を見ると、立ちどまつた。

「ちよいと、あなたルウズヴェルトさんの坊ちゃんぢやなくつて。」



子供は圓まつちい顔をあげた。

「さうだよ、何か用なの、小母ちゃん。」

「坊ちゃん。」孔雀のやうな婦人は、指をあげてたしなめるやうな眞似をした。「あなたルウズヴェルトさんの坊ちゃんぢやありませんか。そんな下方の子供達と一緒に遊ぶものぢやありません。お父様に叱られますよ。」

「叱られるもんかい。」子供は猿のやうに白い歯を見せた。「お父さまはいつも言つてらあ。子供には背の高いのと低いのと、お伶俐なのと意地悪なのとあるばかしだつて。下方の子供だなんて、そんなのがあるもんかい。」

### 黒い運轉手と

チャアアルズ・シュワツプは今では閑地で遊んでゐるらしいが、戦時中はアメリカカ切つて

の働き手として、その凄腕つぷりを見せたものだ。そのシュワツプが、ある時自分の古い別荘をとりつけて、その跡へ新しいのを建てかへようとしたことがあつた。シュワツプは、これまでの古い家を、今はもうそれに用がないからといつて、ばらばらに毀すことを好まなかつた。出来ることならそのままそつくり屋敷のどこかへ持つてゆきたいらしかつた。それにつけて難澁なのは、家の周圍に澤山立木があることで、それを傷めないでは家を動かすわけにゆかないらしかつた。で、そんなことに経験のある請負師が呼ばれて、相談にあづかつた。請負師は困つたやうに幾度か立木のなかを見あるいてゐたが、やがてシュワツプの前へ出て來た折には、晴々しい顔つきをしてゐた。

「旦那。造作もないこつてす。たつた三本だけ庭木をないものと思つていただきませう。」

「なに、庭木を三本だけないものと思へつて。」シュワツプは苦い顔をした。「つまりピフテキが食べたさに、うちの飼牛を殺せといふんだな。わしにそんな眞似が出来ると思ふのか。」

請負師はピフテキのやうに顔からあぶら汗を流した。そして主人公の言ふがままに、高い足場を組み立て、古い家をうんと持ち上げて、庭木の枝一本折らないで、やつとこさで頭越



しに屋敷のほかの場所へ持ち運ぶことにしたさうだ。庭木をいたはる心掛は殊勝な事だが、大きな別荘をそのままそつくり持ち上げて、庭木の上を運ぶなど、アメリカ人でないところよつと思ひつきさうにもないことである。

そのシユワツプが、ある時黒ん坊の運轉手と肩を並べて、同じ運轉手臺に腰をおろして、紐育の街を走らせてゐたことがあつた。すると、街を通り合はせた二人の紳士があつたが、その一人が自動車を指さして、

「見ろ。あの車に名高いシユワツプさんが乗つてる。」

と言つたものだ。すると、今一人の紳士は、

「なに、シユワツプさん？ どちらがね？」

と胡散さうに言つて、駆けてゆく自動車の運轉手臺を見たさうだ。それをちらと小耳に挟んだシユワツプは、長い一生を通じてその瞬間ほど、どやしつけられたやうな思ひをしたことはないと言つてゐる。運轉手臺には黒ん坊と彼とたつた二人しかゐなかつたのである。

## 禪僧と靴

つい先日亡くなつた丹波國何鹿郡東八田村安國寺の住職梅垣謙道和尚は、今一休と言はれただけに、いろんな逸話に富んだ坊さんであつた。

ある夏和尚は叡山の僧坊を借りて、夏季修養會を開いた事があつた。豫て和尚の人柄を聞いてゐた學生達は、物好き半分に、二三十人ばかり集つて來た。

和尚は、それを一堂に集めて、嚴つべらしい顔をして言つた。夏分の修養は、何よりも涼しく、おまけに手輕でなくてはならない、それには各自に放屁するに限る、と。

學生達は、呆氣に取られた。放屁して修養になる事なら、わざわざ叡山のとつ邊まで來るにも及ぶまいといふので、たうとう折角の修養會も丸潰れになつてしまつた。

いつだつたか、京都の市會議事堂で、慈善音樂會が開かれた事があつた。托鉢の道すがら



その前を通りかかった和尚は、肝腎の托鉢をそちのけにして、音樂會の入口に立つた。實を言ふと、和尚はこれまで一度だつて音樂會といふものを聞いた事がなかつたので、前を通り合はせたのを縁に、ちよつと覗いてみたくなつたのだ。

和尚はつかつかと玄關に入つて來た。托鉢の途中なので、胸には南禪僧堂の頭陀袋をかけた足には草鞋を穿いてゐた。

受付には、頭を綺麗にわけた若い男と、孔雀のやうに着飾つた若い女とが立つてゐた。若い男は、今和尚の入つて來るのを見ると、片手で和尚の胸を押へるやうにして、片手で玄關に貼つてあつた紙片を指さした。紙片には「靴の外昇降を禁ず」と書いてあつた。

和尚はじつとそれを讀んでゐたが、

「靴といふのは、一體どんなもんぢやな。」

と、だしぬけに訊いた。若い男は和尚の間が餘りむづかし過ぎるので、ちよつと面喰つたらしかつたが、仕合せとその日は自分が新調の靴を穿いてゐたので、得意さうにそれを片足前へ踏み出して見せた。

「見ておきなさい。靴とはこんなもんですよ。」

「ほほう、變なもんぢやな。」和尚は不思議さうに若い男の足を覗き込んだ。「村へ土産にしたいから、それを片足貰へまいかな。」

「滅相な。」

若い男はあわてて片足を引込めた。

「ははあ、惜しいと見えるの。」和尚は大きな聲で笑ひ出した。「一體その靴といふものは、何でこしらへてあるのぢやな。」

「靴ですか、靴は……」若い男は無作法な坊主をこらしめるには、なんでも強い事を言ふに限るとでも思つたらしかつた。「靴は牛の皮のもあれば、象の皮のもあります。それから虎の皮のだつてあります。」

「ほほう。して見ると、みんな獸の皮ぢやな。乃公のは草鞋といつて、米の皮ぢやぞ。」と言つたかと思ふと、和尚は泥のへばりついた草鞋のまま、すつと玄關を駈け上つて中へ入つてしまつた。



## 寄附金

亡くなつた丹波國何鹿郡安國寺の住持梅垣謙道師が、いろんな奇行に富んだ坊さんだつた事は前に書いた。

いつだつたか、謙道師は大本教の教祖出口お直婆さんの評判が餘り喧しいので、つい會つてみた、わざわざ安國寺から綾部の大本教本部まで訪ねて行つた事があつた。

その折お直婆さんは、風邪か何かで臥せてゐた。取次の者がその由を言つて斷ると、

「なに、病氣か、病氣なら仕方がない。病室へ行つて會はう。」

謙道師はかう言ひながら、草鞋を脱いで玄關に上つてゐた。取次は病室に案内するより仕方がなかつた。

臥せてゐたお直婆さんは、室に入つて來た坊主の姿を見ると、慌てて起き上らうとした。

謙道師はそれを手で押へるやうにした。

「そのままに。そのままにゐて下さい。」謙道師はどかりとお直婆さんの枕元に坐つた。そして檀家の皺くちや婆さんに説教するやうに言つた。「起き上ると、兎角妄念が頭を持上げるでな。病人は寝てゐるに限る。淨土の法然坊も言つた。淨土の行人は病患を得てこれを樂しむとな。」

お直婆さんは赤ん坊のやうに口をもぐもぐさせた。法然がなんと言はうが、病氣は一日も早く癒つた方がいらしかつた。

暫くすると、謙道師は急に居すまひを直した。そして今度自分の寺で本堂を修繕したいから、應分の寄附を頼みたいと言ひ出した。

「お宗旨が違ひまへんが。」

お直婆さんは小鳥のやうに口を尖らした。

「宗旨は違つても構ひません。お互ひづくぢや。乃公の方では、本堂の修繕さへ出來ればそれでいいのぢやからな。」



謙道師は氣もない顔をしてこんな事を言つた。お直婆さんはこんな坊さんに見込まれては黙つて金を渡すより仕方がなかつた。婆さんは執事を呼んで金を五十圓寄附した。

頭の圓い坊さんは、その五十圓を黙つて懷中に挿ち込んだ。

「いや、ありがたう。御寄進は確かに戴きました。それについて今一つお頼みがあるのぢやが……」

謙道師はにやにや笑ひ出した。

「頼みつてなんです。私、今日は頭が病んで……」

婆さんはわざとらしく頭に手をやつて顔を擧めた。出来ることなら、こんな無作法な客に一刻も早く歸つて貰ひたかつたが、そんなことに遠慮する謙道師ではなかつた。

「お頼みといふのは外でもない。あんたも以前は大工のおかみさんぢやつたが、兎も角も乃公の寺に、大枚五十兩の寄進が出来るやうになりなすつた。結構な事ぢや……」謙道師はかう言つて懷の上から五十兩を叩いて見せた。「そんなに結構になつたお祝として、別に三十圓寄進に附かつしやう。」

「別口にまた三十圓どすか……」

お直婆さんは、何の爲に關係のない安國寺に、二口までも寄進をしなければならぬのか理由が解らないらしく、口の中でぶつぶつ呟いてゐたが、それでも執事を呼んで、その三十圓をも出させた。

「奇特な事ぢや、病氣は確かに癒りますぞ。」

謙道師は醫者でも言ひさうな事を言つて、その三十圓をも懷中に入れて座を立つた。

## 大阪の道路

近頃の大阪市の道路ほどひどいものを自分はまだ見た事がない。少し雨でも降り續くと、道といふ道は、まるで糠味噌のやうにぬかつてしまふ。すべて頭でも、道でも、よくするには金がかかるものだと思つてゐる大阪人は、それでも黙つて辛抱して、馬のやうに拔足をし



て、そのなかを歩き廻つてゐる。

十八世紀の初め頃、墺太利の維也納の市街が丁度それで、雨降りの日にでもなると、道路は大ぬかりにぬかつて、市民は外へ出るのが億劫でならなかつた。その頃の宰相はロブコウキチ公といふ政治家で、ひどくそれを苦に病んで、幾度か市長宛に訓令を出しは出したが、市街はいつまで経つても少しも綺麗にならなかつた。

宰相は一思案した。で、ある日のこと、市長を官邸に招待した。蛙のやうに泥濘に住むことの好きな市長も、目上の人から招待せられる有難さは知つてゐた。その日になると、市長はしつくりと禮服を着込み、絹製のくつした鞵くつしたに、おろし立ての靴を穿いて、大威張りで出掛けて行つた。

宰相はにこにこ顔で出迎へてくれたが、二言三言話してゐるうちに急に顔を曇らせた。

「今日は君とゆつくり落ちついて話したいと思つてゐたのだが、急に差迫つた用事が起きたので、これから出掛けなくつちやならん。ついでにはお氣の毒だが、私と一緒に馬車に乗つて途々用談を聞いてはくれまいかね。なんならお宅の前で車をとめるから、君の馬車は返した

が、いいぢやないか。」

宰相の馬車に相乗りが出来た事だつたら、市長は靴となつても厭はない程だつたので、二つ返事で直ぐに承知して、自分の馬車は先へ還した。そしていい氣になつて、宰相の馬車に相乗りをした。宰相は途々馬やお天氣や、英吉利の政治家の噂などそんな下らない事ばかり話して、用談らしい事は一向おこび嘸氣にも出さなかつたが、馬車が維也納でも名うての穢い街へ入つて來ると、急に慌て出した。

「これはおそろしく穢い街へ出た。すつかり方角を間違へたものと見える。氣の毒だが君には下りて貰はうぢやないか。もう約束の時間に間もないのに、これからまた後返りをしなくちやならぬんだからね。」

市長は馬車の扉をあけて外を見た。街は泥田のやうにぬかつてゐた。市長は自分の禮服を見、絹の鞵を見、おろし立ての靴を見て泣き出しさうな顔になつた。

「これぢや逆も歩けさうにありませんから、もう少し先まで御一緒に願はれますまいか。」  
「それはいかん。何分時間が差逼つてゐるんだから。」



宰相はきつぱりと撥ねつけた。

市長はすつかりあきらめたらしく、いきなり馬車を飛び下りた。そして蛙のやうな恰好をして泥濘のなかを泳ぎ廻つた。宰相は馬車の窓からそれを見おろして聲を立てて笑つた。

お蔭で、それから暫くすると、維也納の市街は見違へるほど立派になつた。大阪の市街に困つてゐる人達よ。一度雨降りの日に自動車の窓から市長や市會議員達を泥濘のなかに放り出してみたらどんなものだらう。理窟よりも實物教育の解りやすい人達だけに、案外効力があるかも知れない。

### フォツシユ將軍と葉卷

當今聯合軍での大立者といつたら、十人が十人まで佛蘭西のフォツシユ將軍だといふのに異存があるべくもない。その將軍に多くの人と異つた一つの癖がある。

癖——といふと、荒つぽい日本の將軍達に少しでも近づきを持つてゐる人だと、すぐと口を尖らせて、

「それは吃度厭のかへりに馬を撫でたその掌で、女中の頬べたを思ひきり擲しつける癖なんだらう。」

と言ふかも知れない。それも一つの立派な癖には相違ないが、フォツシユ將軍のは、そんなのとは少し違つてゐる。

將軍の癖といふのは葉卷の喫み方で、將軍は今度の戦争が始まつてから、今日になるまでたつた一本の葉卷しかふかしてゐない。といふと、どんな正直な人でもが、腹を立てるかも知れないが、實際將軍はたつた一本の葉卷しか持つてゐないのだから仕方がない。

その一本の葉卷を將軍はいつも口に咥へてゐる。食事の時は叮嚀に卓子の上にそつとそれを置き、食事が済むと、またそれを咥へてゐる。かうして朝起きるとから夜分寢床に入るまで、その同じ葉卷を咥へ續けてゐる。尤も一度だつて、その葉卷に火を点けた事はない。將軍の言ふのでは、この人は生れてから今日まで、まだ一度も火の点いた葉卷をふかした事が



ないさうである。

「火の點いた葉巻からは烟が出る。私は烟には堪へられない。」

將軍は軍人にしては少し上品過ぎる顔をしかめて、言ひ言ひしてゐる。

葉巻といへば、米國では引續いて三代も葉巻一つふかさなない大統領が續いてゐる。

ルウズヴェルト

タフト

ウイルソン

いづれもが、揃ひも揃つて烟を好かない人達である。

### 黴菌を嚙んだ化學者

學者や藝術家といふ輩には、自分の研究や作物に熱中し出すと、つい自分をも、世間をも

忘れてしまふやうな人がよくある。況して晩飯や借金の事などは。歴史家のモムゼンはさういふなかでも、一番よく物忘れをする人だつた。

ある日の事、モムゼンはいつものやうに書齋に入つて、何か調べ物をしてゐた。ちやうど時分どきになつたので、下男は料理をもつて入つて來たが、主人の歴史家は唯もう仕事に氣をとられて、一向食事の事など考へてゐないらしかつたので、下男は側の卓子の上に皿を置いて下つて行つた。

暫くして、下男は二皿目を持つてまた書齋に入つて來た。先刻の皿は手もつけないで残つてゐたので、代りに次の皿をおいて、前のはそのまま下げて來た。そして料理部屋で舌鼓を打ちながらこつそりそれを食べた。どんな場合にも盗み食ひはうまいものであるが、とりわけ學者が氣むづかしい顔をしてゐる隣の室での盗み食ひはまた格別なものである。

下男はまた三皿目を持つて來た。歴史家が羅馬大帝國の事に頭をつかつてゐる間に、二皿目の肉片はもう冷えきつてゐたので、下男はそれをも下げて、次の室で食べてしまつた。それからものの二時間も経つと、モムゼンが疲れたやうな顔をして臺所に入つて來た。



「おい、もう時分どきを大分過ぎてるやうだが、まだ午飯を食べさせないのかね。」

「午飯ですつて。」下男はしらばくれて笑ひ出した。「まあ、旦那様とした事が、お午飯は先刻召上つたばかりぢやございせんか。」

「えッ、もう食べたつて。さうかなあ。」とこの偉大な歴史家は両手でもつてぺこぺこになつた横つ腹を押へてみるらしかつたが「成程、さう聞いてみると食べたやうだわい。うん食べた、食べた。確かにお午飯は食べた。いや、とんでもない事を言つて済まなかつたよ。」

歴史家はほんたうに済まなかつたやうに頭を掻きながら、また書齋に歸つて行つた。

パスツウル研究所の創設者ルイス・パスツウルは名高い化学者だつたが、この人もモムゼンと同じやうに、どうかすると自分を忘れる性であつた。ある時娘の家に行つて、櫻實を饗さくらんぼばれた事があつた。娘は木の實を入れた籠と、水を盛つた井とを卓子の上に置いた。

「お父さん、これ採り立ての櫻實なのよ。埃や毛蟲の卵がくつ着いてもいけないから、一粒づつこの水で洗つて召上れよ。」

「うむ、よしよし。」

老いた化学者は娘の言ひなりどほりに、さくらんぼを一つづつ叮嚀に井の水で洗つて食べてゐたが、暫くすると籠のなかは空つぽになつた。すると、化学者は手を伸ばして井を取上げた。そしてそれを唇に持つていつたかと思ふと、なかの水をぐつと一息に飲み干してしまつた。埃も、黴菌も、毛蟲の卵も一緒くたに。

## 首を繫ぐ法

和蘭のアメロンゲンの城に落ち延びた前の獨逸皇帝は、近頃頻りと何か書き物をしてゐるといふが、その書き物が何であるかといふ事は、誰一人知つてゐる者がない。しかし此の人が辯疏がましい隠し立てなどしないで、あけすけに、公然おほびらに、今度の戦争の事情いきさつを懺悔したら、どんなにか面白い書物が出来るだらう。歐羅巴の外交家達は、その懺悔録の前で眞赤に



なつて、馬のやうに鼻を鳴らしたり、狗兒のやうにとつ組合ひを始めるに相違ない。

そのむかし、獨逸にシユレエツエルといふ外交官があつた。時の宰相ビスマルクに睨まれて、だしぬけに休職といふ辭令を受取つたが、強ひて平氣な顔をして宰相に挨拶に行つたものだ。宰相は肥つた體軀を椅子にもたせて、何か考へ事をしてゐたらしかつたが、この休職外交官を見ると、急に拵へたやうな愛想を言つた。

「君もやつと閑な體になつたといふものだが、これから何をするね。」

「さあ、何を致しませう。」外交官は落着き拂つて返辭をした。「當分はまあ宅に引込んで、回想録でも書くんですね。御存じの通り、私も長らく官海にゐたものですから、随分いろいろな事を見聞してまゐりましたよ。それを一つあけすけに書いて見たらと思ひましてね。」

ビスマルクは驚のやうな怖い眼つきをして、じつと客人を見つめた。この外交官はその頃名うての筆まめな男で、勢はまみに乗るとどんな皮肉を書き出すか判らなかつた。物もあらうに回想録とは、聞く身にとつていかにも氣持が悪かつた。

「回想録もよからうが、茲で一つ君に相談があるんだがね。」ビスマルクは椅子から心もち

乗り出して來た。「今米國公使の椅子が空いてゐるんだが、君は行つてくれないかしら。行つてくれると實に都合がいいんだ。」

「参りませう。さういふ思召でしたら。なに回想録なんか何時でもいい事なんですから。」

外交官は直ぐに承知をした。二人は眼と眼を見合はせてにやりと笑つた。

### 名醫後藤新平男

男爵石黒忠憲氏は、今では茶人らしく十徳を着込んで、茶を啜つたり、若い者の嫁を捜したりして、日を暮してゐるが、實をいふと、氏はあれで軍醫總監なのである。尤も氏自身も自分が軍醫だつたのは、夙くの昔に忘れてゐるらしく、偶に人が醫者の話でもすると、氏はまだ見ぬ地獄の取沙汰でも聞くやうに、變な顔をして耳を傾けてゐる。

こなひだの事、あるところに宴會があつて、石黒氏もそれに列席してゐた。氏の直ぐ次に



肩を並べて坐つてゐたのは、世間のいふ成金の一人で、魚のやうな青白い顔に、魚のやうな圓い眼をした男だつた。その男は自分の上座にゐるのが石黒氏だと知ると、懐中から大きな名刺を取出して、相手の膝の上に置いた。

「私はいふ者でございますが、先日中から一度閣下にお目にかかりたいと存じてをりました。」

その男は叮嚀に頭を下げた。石黒氏は眼鏡を取出して名刺を読んだ。

「いや、お初めて。何か御用でもおありかな。」

「はい、一度お閑な節に女房の御診察をお願い致したいと存じまして……」その男は圓い眼を忙しさに瞬きした。「先頃から肋膜をわづらひまして、方々の先生方に……」

「駄目だ、駄目だ。」石黒氏は相手の鼻先で大きな掌を振つた。病身な成金の女房くらゐだつたら、一思ひに絞殺されさうな大きな掌である。「乃公に診て貰はうと思ふには、生命が二つ無くちやならんが、それは御存じだらうな。」

「へえ、生命が二つ？」

成金の男は不思議さうな顔をして考へた。だが、幾度考へてみても自分の女房は乳房を二つ持つてゐる代りに、生命はたつた一つしか持つてゐなかつた。

「驚いたらうな、生命が二つ要るんぢや。」石黒氏はにやにや笑ひながら言つた。「だがここに一人、生命が三つもなければ、とても診て貰へない醫者がある。貴公はその人を御存じかな。」

「いえ、存じません。どなたでいらつしやいます。」

その男は魚のやうな顔であたりを見まはした。

「あすこに居る、あの鯨子張つた男だ。」

石黒氏は床の間に近く坐つてゐる刈鬚の男を指さした。見ると男爵後藤新平氏だつた。

## タフトと菓子



米國の前大統領タフトは法律事務でよく旅をするが、旅先で滅多に故障に出合つた事もなく、おまけにいつの旅立にもお天気が多いので、

「乃公ほど旅運が好い者はたんとあるまい。」

と、あの大きな圖體を揺ぶつて、ひとり嬉しがつてゐる。

最近に西の方へ汽車旅行をした事があるが、その時どうした間違ひか、鐵道に故障があつて汽車は寂しい田舎町に停つたまま、前へ進まれなくなつた。

「乃公が乗込んでる汽車だ。こんな筈はないのだがな。」

タフトはぶつぶつ呟きながら、大きな旅鞆を提げて、のつそりと客車の中から出て來た。

そして停車場前の薄穢い旅籠屋に尻を落ちつける事にした。線路の修覆はかなり手間取るので、汽車は明日の朝までは迎も出さうになかつたからである。

入つて來た旅籠屋の亭主は、お客の大きな圖體を見て變な顔をしたが、その名前を聞くと慌てて叮嚀にお辭儀をした。そして名高い前大統領に一夜の宿を貸す事の出来る自分の仕合せを心から喜んだ。

その次の瞬間、亭主は自分の家に持合せの寢臺が、いづれも安物づくめな、やにつこい出來であるのを思ひ出して、當惑さうな顔をした。で、早速の氣轉で、お客の重みで寢臺が潰されないやうに、鐵線はりねでもつて方々を蜘蛛の巢のやうに絡めにかかつた。

夜があけてタフトが朝食の席につくと、亭主は揉み手をしながら御機嫌伺ひに出て來た。

「旦那様、いかがでございました。よくおやすみになられましたでしょうか。」

「有難う。いや、よく眠れたよ。」前の大統領はなんだか思ひ出し笑ひをするらしく、顔を歪めた。「だがの、今朝眼がさめて自分の寢相を見ると、乃公の體が寢臺の外に食み出してゐて、まるでワツフルのやうだつたよ、はははは……」

人間は時々自分をナポレオンやソクラテスに比べるやうに、菓子や眼藥の壘にも比べてみる必要がある。自分が菓子に似てゐるなと思ふのは、英雄に似てゐると思ふよりも、どうかすると心強い感じを與へるものだ。



## 俘虜紹介状

英國の陸軍將校を數多くぶち込んでゐる獨逸の俘虜收容所に、一人の軍曹がある。神信心の深い男で、

「汝の敵を愛せよ。」

と言つた耶蘇の言葉を文字通りに取つて、氣の毒な俘虜を並外れて勞はるところから、いつとなくそこにある人達と懇意になつて、毎朝顔を見合はすと、仲のいい友達のやうに、いつと笑ふ程の仲になつた。

ある朝の事、軍曹は洋袴ズボンの隠しに両手を差込んだまま、妙に悄氣た顔をして入つて來た。それを見た俘虜の一人が訊いた。

「どうしたい、ひどく滅入つてるぢやないか。」

「いよいよお別れが來ました。二三日中に貴方方と別れなくつちやならんかも知れません。」

軍曹は狗兒のやうに悲しさうな眼つきをした。

理由を聞くと、自分はいつまでも收容所にゐて氣の毒な敵を愛したいのだが、今度いよいよ戦地へ送り出されて、前線へ立たなければならなくなつたといふのだ。

「僕は戦線へ立つと、吃度俘虜になるやうな氣がしてなりません。」軍曹は玩具の笛のやうな悲しさうな聲で言つた。「で、貴方方に一つお願いがあるんですが、背いては戴けないでせうか。」

「願ひといふと……」

將校の一人が榮養不良の顔を突き出しながら訊いた。

「外でもない、紹介状を書いて貰ひたいんです。俘虜になつた折の……」軍曹は言ひ難さうに頼んだ。「收容所におち込まれても、僕だけは成るべく別扱ひにして貰へるやうに……」

英國の將校達は顔を見合はせて笑つた。そして言ふ事が面白いからといつて、早速英語の紹介状を一通書いて渡した。軍曹は無論英語は讀めなかつたが、にこにこもので、幾度か禮



を言つてポケットに押込んだ。

軍曹は戦線へ出ると、案の定蘇格蘭兵と戦つて俘虜になつた。そして將校の前へ引出されると、待ち設けてゐたやうに内ポケットから例の紹介状を取出した。將校は不審さうに眉を顰めて、それを讀み下してゐたが、暫くすると腹の底から揺り上げるやうに笑ひ出した。手紙にはかう書いてあつた。

「この男はLといふ軍曹です、悪い奴ぢやありません。別扱ひにしてくれと言ひますから一度に撃ち殺さないで、ゆつくり苛め殺してやつて下さう。」

## 大臣の顔觸

いよいよ原氏が内閣を組織した。閣員の顔觸もやつときまつた。政友會の領袖で、この顔觸に洩れた人達は、

「原の白髪頭め、俺の事を忘れとるのかしら。かう見えても俺だつて立派な大臣級だ。」と、内々呟いてゐまいものでもない。

原敬氏がこの自惚を、どんな鹽梅に取扱ふかは見物である。これを巧く利用したものに徳川家康がゐる。ある時何かの席で、福島正則が家康に追従を言つた事があつた。あの武骨者に追従がと不思議がる人があるかも知れないが、武骨者はよく追従を言ふものである。

「數多い御家來衆のなかで、井伊氏と本多氏と榊原氏とは、實に天晴の武勇で、この三人こそは御當家の重寶かと存じまする。」

正則はかう言つて、獸が媚びをする折のやうな眼をして家康の顔を見た。家康はその折もいつものやうにわざとらしくにこにこしてゐた。

「さうぢや、右の三人は無論傑れてはをるが、」家康はいつもの癖で、硬ばつた掌で軽く膝頭を叩いた。「しかし當家の重寶といへば、あながちこの三人には限らぬ、少く見積つても先づ十人はござる。」

「なに、十人と仰せられまするか。」



正則は吃驚したやうに眼を一杯に見張つた。

「うむ、たしかに十人はござる。」

家康はその十人を革財布にしまつて、懷中に挿ち込んででもゐるやうに、きつぱりと言つた。

「すりや、残りの七人は誰々でござりまするな。」

正則は木の株のやうな頑丈な膝を乗り出して來た。家康は狡さうな眼つきで、ちらと正則の容子を見てゐたやうだつたが、だしぬけに、

「はははは……」

と大聲をあげて笑つた。正則は何がなんだか分らないで、馬のやうに鼻面はなづらをくしゃくしゃさせた。

家康の狸爺め。十人と言つて置けば、數多い家來達がいつかそれを聞き傳へて、

「あとの七人は誰々だらう——俺もその一人かな。」

と、めいめい吃度武勇を勵むやうになるだらうといふので、わざとかうした人喜ばせを言つ

たのである。

原敬氏に教へる。人が大臣選定の苦心でも訊いたなら、わざと顔をしかめて、

「さうだな。今度ほど困つた事はなかつた。何しろ政友會には大臣級の人物がざつと四十七人もあるのだからね。」

と言つておく事だ。四十七は赤穂義士の數でもあり、いろは文字の數でもある。その通俗な事にかけては、頭の悪い政黨員にとつても、分り易い數字である。

## 結婚祝ひ

ノobel賞金の創設者として聞えた瑞典のアルフレッド・バイ・ノobelの邸に、長年の間まめに女中頭を勤め通した女があつた。ところが、縁あつて他へ嫁かたく事になつた。すべての女は、どんなまづい結婚でも、獨身よりはましだと思つてゐるもので、これは人生といふ



ものに對して、どの女もが持つてゐる一番大きな誤解だが、この女中頭もやはりそれを持つてゐたので、兎も角も結婚する事にきめてしまつた。

主人のノオベルはその話を聴くと、寢椅子から半分身體をおこしかけた。

「それはめでたいの。長年の間まめに勤めてくれたお前に出て行かれるのはつらいが、然し結婚と聞いては、強ひて引留めるわけにもいくまい。ところで、お祝ひだて——」と主人はにやにや笑ひながら、女中頭の顔を見た。これまでは女中頭として世界第一等の顔立のやうに思つてゐたが、今見ると花嫁として一番やくざ者のやうに思はれた。「何かお祝ひに贈りたいと思ふんだが、なんでもいいからお前の欲しがつてゐるものを言つてみるがいい。」

女中頭はノオベル家のうちで欲しいものをどつさり持つてゐた。第一に主人の財産が欲しかつた。第二に主人の臺所が欲しかつた。第三に主人の寢椅子が欲しかつた。が、そんなものは、主人がなかなか「諾」と言ひさうになかつた。で、早速花婿の許へ駆けつけて相談する事にした。

花婿はそれを聞いて、美しい女中頭が、どつさり「幸福」を背負つて自分の體のなかへ潜

り込むやうに思つた。

「何をお願いしたものでらうな。」

「何をお願いしたものでせうね。」

二人は顔をつき合はせて相談したが、やつと相談が取決つた時には、二人とも素晴らしい仕事をしたやうに疲れてゐた。

女中頭は主家に歸つて來た。そして同じじしながら口を切つた。

「旦那様、私どもの婚禮に祝つて戴きたいといふものが、やつと見つかりましてございますが、ほんたうに祝つて戴かれますのでございませうか。」

「ほんたうだともさ。」恐しいダイナマイトの製造業者は、女中頭の口から、お手の物の爆裂弾が吐き出されようとも、びくともしない心構へをして言つた。

「なんでもいいから、お前の欲しいものを言へと言つたぢやないか。」

「有難うございます。」花嫁は叮嚀に頭を下げた。「それでは恐れ入りますが、旦那様のお儲けになるお金の一日分だけを戴きたうございます。」



「よからう。」と主人は直ぐ承知をした。「だが、勘定するのに少し手間が取れようて。」  
 實際勘定をするのに手間が取れた。それがために十一人の書記が幾日か働かされた。そして女中頭は結婚祝ひとして二萬八千弗の金を渡された。

### 原敬氏と鯛の盆

政友會總裁原敬氏が、最近北國遊説の途すがら、越中高岡の商品陳列所へ行つた事があつた。名士といはれる人達がかういふ所へ出掛けると、記念のために何か購ひ取らなければならぬのを原敬氏はよく知つてゐた。

羽織袴で出迎へた陳列所の關係者達は、名高い政友會の總裁がどんな素晴らしい買物をするだらうかと興味を持つて待ち設けた。ことによつたら陳列所の品物全部を、根こそぎ買ひ取らうとも言ひ出しはしなからうかと思つて、内心びくびくものでゐた。

原氏は五人前一圓五十錢の前茶茶碗を買つた。一組二圓の吸物椀を買つた。硯箱、巻煙草入、灰落し……やくざな政黨員のやうな安物ばかり買ひ取つた。そして正札三十圓と値段のついた七寶の花瓶が目につくと、まるで仲違ひの加藤高明氏にでも出合つたやうに、顔を反けて通り過ぎた。

ふと櫛のくり盆が原氏の目にとまつた。それは田舎の村長などの好きさうな鯛の恰好をしたもので、二圓三十錢といふ札が付いてゐた。

「高橋君……」原氏は祕書役の高橋光威氏を振返つた。「あの盆を一つ買つておいてくれ。」  
 「盆でございませうか、あの鯛の恰好をした……」

高橋氏は變な眼つきをしてその盆を見た。高橋氏は原氏の夫人から言ひつかつてゐる事があつた。それは原氏が旅へ出ると、いつも無益な買物ばかりするので、成るべく側にて留立してくれといふ事だつた。高橋氏は頭のなかに原夫人の険しい顔を思ひ浮べた。そこへのつそりとやつて來たのが小林源藏氏だつた。小林氏は獵師のやうな眼つきをして、ちよつとその盆を見たが、すぐ吐き出すやうに言つた。



「これはいかん。この鯛はまるで死んどる。」

「死んでたつていいぢやないか。」強情な原氏は小林氏を尻目にかけた。「腐つても鯛といふ事がある。」

小林氏は行詰つたやうに、口をもぐもぐさせた。そこへ煎茶茶碗や、吸物椀や、灰落しのやうな、安物の政友會代議士が五六人どやどやと入つて來た。そして鯛のくり盆を見ると、てんでに言ひ合はせたやうに首をひねつた。

「これはいけませんね。いくらなんだつて總裁のお買物ぢやありませんよ。」

「それが輿論か……」原氏は髭のない口元をへし曲げるやうにして、皮肉な笑ひを見せた。

「輿論なら仕方がない、それぢや買はない事にしよう。」

皆は手を拍つて喜んだ。いつも總裁の言ふがままになつてゐる彼等にとつては、こんな事で強情つばりな總裁の言分を捨てさせたのが、何よりも嬉しかつたのだ。

だが、それは嫌喜びであつた。原氏は夕方宿へ着くと、こつそり高橋氏を陳列所にやつた。そしてわざわざ件の鯛のくり盆を買ひ取らせて來た。高橋氏は原夫人の険しい顔を思ひ

浮べながら二圓三十錢を支拂つた。

### 新發明書物消毒法

すべての公開圖書館で、管理者が頭を悩ますものは、圖書の購入や保存ばかりではない、その他に圖書の消毒といふ一大事がある。尤も數多い圖書館の管理者には、書棚に樟腦や、ナフタリンをちよつぱり包んだままで、それで結構消毒の目的が達せられてゐるやうに思つてゐる向きもあるが、そんな事では何の役にもたない。

書物を讀まうといふ人達には、肉體的にも精神的にも病人がよくある。さういふ人は、書物の小口に目に見えない病毒を残して行くので、これをどう始末するかが、圖書管理者の問題なのである。サヴァアナオラのやうに、そんな書物は火をつけて焼いてしまつたら、一番面倒がないのだが、さうさうきつぱりした處置も取兼ねるから困るのだ。



東京の或る大きな私立図書館に、老人の管理者があつた。先日職をやめて書肆を開業したさうだが、図書館にゐる間は朝から晩まで、この書物の消毒にひどく頭を使つたものだ。

餘程氣になつたと見えて、ある時わざわざ懇意な醫者を訪ねて訊いてみた。

「先生、書物にへばりついてゐる毒つてえのは、一體どんな物なんですか。」

醫者は老人に了解めるやうに話すには、なかなか骨が折れた。大抵の眞理といふものは、老人のために拵へてない場合が多かつたから。

「それは黴菌さ。手つ取り早く言つたら眼に見えない蟲だね。」

醫者はかう言つて、牧師のやうに胡散臭い顔をした。

「蟲ですかい、眼に見えない……」

老管理者は慌てて、老眼鏡を鼻の上に押上げた。そしてじつと手を組んだまま考へ込んでゐたが、暫くすると、立派な消毒法を思ひついたので、すぐに醫者の家を飛び出して來た。

老管理者は途中で金物屋に寄つて、金鎖を一挺買つて歸つた。そして図書館に入ると、手垢と塵埃とに塗れた書物を、一冊づつ取出しては、いやといふほど叩きつけたものだ。

お蔭で書物は綴が切れたり、表紙が凹んだりして泣き出しさうな顔になつた。やつとそれに氣づいた図書館の保護者が理由を訊くと、この勇敢な老管理者は、勝ち誇つたやうに、

「はい消毒しましたので。恐しい黴菌とやらを、これでこつ酷く擲りつけてやりましたよ。」

と言つて、懷中から大事な金鎖を取出して見せた。

### 三人牧師

日増しに暑くなるにつけて誰も山を想ひ、海を想ひ、旅を想ふやうになつて來た。

去年の夏の事、英國のリヴァプールからボストン通ひの汽船に、ボストンで名高い牧師のフリリップ・ブルックスとダクタア・エリスとブルック・ヘルフォウドの三人が不思議に落ちつた事があつた。一體牧師だの僧侶だのといふものは、立派な道を説いてゐる癖に、案外胸の狭いもので、傳道大會といつたやうな會合の外には、滅多に顔を合はすものではない。



この世でもさうだから、無論天國では一緒になれる筋のものではなかつた。

ちやうど日曜日のことなので、船のなかでも集會があつた。船長は三人のなかで誰か一人にその日の説教してもらひたいと頼んで來た。一體船のなかといふものは、説教するには打つてつけの場所柄で、附近に立聴きをする神様はゐないし、いくら説教が拙かつたところで、聴衆は耳に手をやつて波のなかに飛び込むわけにはいかないしするから、牧師は落着き拂つていつもの三倍もの長説教が出來ようといふものだ。

ところが、ヘルフォウドは眞先に首をふつた。

「私は夏休み中、日曜日毎に缺かさず説教をしたので、すつかり草臥れちやつた。どうか今日一日だけは休ませて貰ひたいもんで。」

かう言つて、ほんたうに草臥れたらしい顔つきで船長を見かへした。

船長はブルックス牧師の方へ向き直つた。ブルックスはエリス老人の方を指さした。

「そちらにエリスさんがいらつしやる。先輩の方をさし措いて、私どもが出る幕ぢやありません。」

椅子にもたれたまま、うとうとと居眠つてゐたらしいエリス老人は、吃驚したやうに眼をあけた。

「冗談言つちやいけない。皆は貴方の説教を聞かうと思つてるのだ。私のやうな老人が……」  
きつぱり撥ねつけるやうに強く手をふつたが、それでもこの船がそのまま天國の港に船がかりするのだつたら、老人は皆を押退けて誰よりも先に埠頭の土を踏んだに相違なかつた。  
「それぢや、仕方がありません。」船長は悲しさに言つた。「あなた方が揃ひも揃つて説教をして下さらないとなると、この汽船には神様のお慈悲は先づないものと思はなくちやなりません。」

かう言つて、船長は大きな腕を三人の鼻先で振廻した。

「船が無事にポストンに着くかどうかは、唯私の腕に頼る外はありませんぞ。」

船は無事にポストンに着いた。三人の牧師は乗客のなかに紛れて、船から棧橋へ、三匹蛙のやうな腰つきをしてびよいと跨がつた。



## 鼻 糞

生前正岡子規と懇意だった人の話によると、子規はその頃出てゐた「めざまし草」といふ文藝雑誌の會合で、偶に森鷗外氏の宅に来ると、きまつたやうに座敷のなかに寝そべつて、頬杖をついたものだ。そして、

「おい、紅葉君、ちよいとそこの硯を取つてくれたまへ。」  
と、どうかすると側にゐた尾崎紅葉に用事を言ひつけたりする。紅葉は氣取屋で、おまけに子規よりもずつと先輩の積りでゐたから、それが癪にさはつて堪らなかつたらしい。

そればかりか、子規は俳句か何かを考へるときには、よく指先で鼻糞をほじくり出し、掌で丸藥のやうに圓めると、弾き玉か何ぞのやうに、一々それを指先で四邊に弾き飛ばしたものだ。

穢い弾き玉は、ある時は禪僧のやうな露伴の懷中に飛び込み、ある時は山犬のやうな綠雨の襟元に滑り込み、また或る時は氣取屋の紅葉の鼻先を掠めて飛んだ。そんなこんなが餘程機嫌を悪くしたと見えて、紅葉はその後あまり鷗外氏の集會に出なくなつたさうだ。

鼻糞といへば、越後の良寛上人が或る時、濃茶の會に招かれて行つた事があつた。相客が餘所行きの上品な言葉で、風流話に夢中になつてゐる間に、良寛はひとりきよとんとした顔をして、指先で頻りに鼻糞をほじくつてゐた。

さうかうするうちに、濃茶が廻つて來さうになつたので、良寛は急いで掌の鼻糞を圓めにかかつた。そしてそれをこつそり膝の左側に置かうとすると、そこに坐つてゐた客は、じろりと尻目にかけて怖い顔をした。良寛は慌ててそれを拾つて、今度は膝の右側に置かうとした。するとそこに坐つてゐた客は、ちよつと眉をしかめて、口元をへの字形に歪めた。上人は慌ててまたその丸藥を手に取り上げた。

だが、流石に長く禪で苦勞した程あつて、上人はその一刹那、鼻糞は鼻の孔から取出して來たものだといふ事を思つた。佛のものは佛に返さねばならぬ世の中だ。鼻のものは鼻に返



した方が一番無難である。上人は丸薬をそのまま無理やりに鼻の孔に押し込んだ。二つの孔から取出して来たものを、一つの孔に押し返したところで、そんな事くらゐでふくれつ面をする鼻でもなかつた。

上人は舌鼓を打ちながら濃茶を飲んだ。

## 敵と踊る

佛蘭西の歩兵軍曹にジャンといふ男がある。膽の太い、しつかりとした、おまけに教育があつて、佛蘭西語と同様獨逸語をも自由に操る事が出来た。

一體語學が達者に出来るのは得なもので、獨逸のゲーテは、他國の語を一つ覚えるのは、やがて一つの世界を殖やすやうなものだと言つたかに覺えてゐる。世界を一つ殖やすのも面白くない事はないが、それよりも眞實なのは、語學は一種の道樂で、これを習つておけば、

自分の道樂心を満足させる色々の惡戯が出来るといふ事である。

ある眞夜中の事、ジャンは敵情の偵察を言ひつかつて、獨逸軍の塹壕からやつと十米突ばかりの間近まで覗ひ寄つた。すると、何處かにこそそそ人の動く氣配がしたので、ジャンは蜥蜴のやうに地面に腹をすりつけた。だしぬけに低い押潰すやうな聲で呼びかけるのが聞えた。耳を澄ますと、半熟の佛蘭西語である。

「おい、なんだつてそんなに靜かにしてるんだい。僕は先刻から君がやつて来るのを見てたんぢやないか。すると、今地面に這ひ屈んだね。君を撃つと言やしまいし、僕はバヴァリア生れだよ。」

「さうか、今晚は。」

ジャンは立派な獨逸語で返事をした。

「おいおい。」塹壕の中からまた聲がかつた。「君は獨逸語が喋れるんだね。ちよつと待つてくれ。今朋輩を起して来るから。丁度今は士官がゐないから一等都合がいいんだよ。」

ジャンはいくらか心配な氣もしたが、それでもじつと待つてゐる事にした。暫くすると、



バヴァリア兵は獨逸式の軍服と軍帽とを持つて出て來た。そしてそれをジャンに被<sup>き</sup>せて、自分達の塹壕内に連れ込んだ。

そこでは浴びる程うまい麥酒を飲む事が出來た。ジャンは酔つた紛れに變な腰つきをして舞踊を踊つた。バヴァリア兵は小聲で歌を唄つた。いよいよお別れになると、彼等はいろいろな土産物をジャンに呉れた。

「今度またおいでよ、口笛で合圖して呉れば、銃なんか撃ちやしないよ。」彼等は十年の友達にでも別れるやうに言つた。「僕達はバヴァリア人だよ。佛蘭西は大好きなんだが、止むを得ず戦争してゐるんだからね。」

### 顯微鏡の寄附

富豪アンドリウ・カアネギイの知人で、獨逸へ渡つてエナ大學で名高いヘツケル教授に弟

子入りをしようといふ男があつた。幾らか補助金をも貰つてゐるので、出發前に一度この富豪を訪ねて、暇乞ひの挨拶をした。

カアネギイはヘツケル教授の名を聞くと、眼を光らせた。

「ヘツケル！ヘツケル教授といへば名高い學者だ。それに就いて、一つお頼みがあるんだが、もしか彼地<sup>あちら</sup>で教授にお會ひだったら、記念のために何でもよろしい、あの人の手蹟が貰つていただけまいかしら。」

「よろしい、承知しました。」

その男はヘツケル教授の従弟でもあるやうに安請合に請合つた。そして教授や自分達のやうな、學者の手蹟を蒐めようといふカアネギイは、まあなんとした物の解つた爺さんだらうと思つて、じつと富豪の顔を見つめた。だが實をいふと、カアネギイはその折にはもうヘツケル教授の事も、自分の眼の前にゐる客の事も忘れて、鐵の値段でも胸算用してゐるらしかつた。

その男がエナ大學に着いて、暫くすると、ヘツケル教授から手紙がカアネギイのところ



届いた。鋼鐵王は急いで封を切った。なかから零れ落ちたのは、かねて待ち設けたヘツケル教授の紛れのない手蹟であつた。

ツンプト式顯微鏡 一個

右エナ大學植物研究室へ御寄贈下さつたに就きましては厚くお禮を申し述べます。

エルネスト・ヘツケル

アンドリウ・カアネギイ殿

カアネギイは釘抜きで鼻先を振ち曲げられたやうな顔をして苦笑ひをした。でも、次の瞬間には執事を呼んでツンプト式顯微鏡を購入するだけの金子をエナのヘツケル教授宛に送るやうに言ひつけるのを忘れなかつた。

そこらの富豪達もよく聞いて置くがいい。カアネギイのする事に、何一つ間違つた事は無いが、安心なのは學者など餘り友達に持たない事である。

### 愕堂の日本料理談

佛蘭西通の稻畑勝太郎氏が、こなひだ何かの用事で尾崎行雄氏を訪ねた事があつた。用談が済むと、尾崎氏はお客を連れて、自分の家の食堂に入った。

「別に何も無いが、女房の手料理を味はつてくれ給へ。」

その口振りから察すると、テオドラ夫人の庖丁加減が大分自慢らしかつた。

實際テオドラ夫人の手料理は旨かつた。尾崎氏は肉汁で汚れた胡麻鹽の口髭を拵りながら料理についていろいろの事を話した。

「一體これまでの日本料理は、見た眼にはなかなか美しいが、味はつてみると一向うまくありませんね。」と尾崎氏は聴衆が少いのを物足りないやうに、卓上に竝んだ薬味臺や洋酒の壺をじつと見入つた。「あれは徳川氏が自分の政策上から、あんな料理法を拵へ上げたので、



一體吾々の食べる魚肉といふものは、皮と肉との間が膩ちりが乗つてゐて、一番うまいものなんです。ところが、徳川氏は諸大名を肉體的に衰へさせるには、そんな結構な所を食べさせてはならないといふので、今に傳はつてゐるやうな見た眼に美しい料理法を奨励する事になりました……」

「成程面白い御觀察で……」

稲畑氏は感心したやうに首をふつた。

「その政策がまんまと當つて、諸大名は見た眼の美しい料理ばかりを好くやうになつた結果肉體の力が衰へて、野心も何も無くなつてしまひました。」尾崎氏は自分でもその觀察の奇抜なのに感心したやうに、とんと軽く卓子の上を敲いた。ピフテキは吃驚したやうに皿の中で顫へた。「ところが妙なもので、その徳川氏自身がいつの間にかそんな料理に舌鼓を打つやうになつたものですから、段々精力が衰へてたうとう自滅するやうな運命になりました。」

「しますると……」稲畑氏は肉刀をかちかち言はせながら調子を合はせた。「日本人を新しく拵へ上げるには、今迄の料理法から遠ざかつて、皮肉の間を食べるやうにしなければなり

ませんね。」

「さやう。さやう。」

尾崎氏は氣に入つたやうに頷いた。そしてテオドラ夫人の手料理は、とりわけ、その點によく氣をつけてあるやうに、安心してピフテキに齧りついた。

結構な議論だが、しかしこんな結構な議論を人前でしゃべり散らすなどは考へ物で、もしかこれが反對黨の原敬氏の耳にでも入つて、三度三度皮肉の間を食べられでもしたら、尾崎氏も困る事になりはしないだらうか。とかく内證の事、内證の事。

## 停車場の演説

グラッドストオンといへば、大臣を勤めてゐる時も、やめてゐる時も、いつも人氣のあつた政治家で、偶に旅行でもする時には、おそろしく澤山な新聞雑誌の記者が一緒に蹤いて行



つたものだが、この偉大な政治家は、そのいづれをも満足させて歸したものだ。

ある時こんな事があつた。それはグラッドストオンが、何かの用事で倫敦からエディンバラに出掛けた旅行中の事で、その折はどういふものか、新聞記者といつたら、某社の記者がたつた一人隨行してゐるに過ぎなかつた。

汽車が途中の或る驛に着くと、停車場にはこの偉大な政治家を一目見ようといふ、物好きな土地の人が一杯に待つてゐた。無精な日本の政治家、例へば原敬氏のやうな人だつたら、動物園にゐるシベリヤ産の狐のやうに、窓から白っぽい頭を覗かせて、狡さうにちよつと會釋をするくらゐに過ぎなからうが、この英國の首相はわざわざ入口に出て来て、出迎人を相手に演説を始めた。

土地の人は、思ひがけなくこの政治家の演説が聴かれるといふので、ぎつしり汽車の前に押しつめて來た。田舎の人達の事とて、胃の腑の詰つてゐる代りに、頭のなかは空罐のやうに空つぽだつたから、演説は一言一句そのままに入つて行つたが、几帳面な汽車の時間表は首相の演説にも少しも容赦はしなかつた。汽車は呆氣にとられた出迎人をプラットフォーム

に残して、さつさと出て行つた。

それでもグラッドストオンは演説を止めなかつた。今度は側に立つてゐる某社の記者の方へ向き直つて、持前の雄辯を揮ひ出した。幸ひ記者は速記を心得てゐたから、少しも狼狽へなかつた。早速手帖を取出して、瀧のやうな首相の雄辯をそのままそつくり書きとめる事が出來た。

記者の速記はそのまま翌日の新聞紙に現れた。停車場で政治家の演説を聞きさせた地方人の驚きは大したものであつた。——グラッドストオンはかういふ風に、通信機關を巧みに利用する事を知つてゐる人だつたから、氏が公的生活から隱退すると、ある通信社などは、靦面に二萬圓ばかり収入が減つたといふ事だ。

## 花嫁を忘れる



學者や發明家などといふ輩は、一事に熱中して心を奪はれる結果、どうかすると、うつかりして身邊みよまはりの事を忘れるが多い。忘れないからといつて、學者として立つのに少しの差支もないが、忘れた方が愛嬌になる場合が多い。

發明家トオマス・エディソン（といふとエディソンは顔をしかめて、自分は發明家などといふそんな偉い者ぢやない、言はば工夫家さと言譯をするかも知れない。）も實はその一人だつた。エディソンは結婚をすると、すぐに花嫁を連れて新婚旅行に立つたが、二週間ばかり静かな田舎を歩き廻つて、やつと都へ歸つて來た事があつた。

汽車が停車場に着くと、この發明家は急いで歩廊に飛び出した。そして何事かを考へ込んでゐるやうに、兩手を胸の上に拱いたまま、少し俯向き加減に市街へ差しかからうとした。すると思ひがけなく、

「おい君、エディソン君。」

と呼びかけた者がある。發明家はひよいと顔をあげてみた。前には友達ともだちの一人が立つてゐた。

「君、何か忘れ物をしてやしないかい。」

「忘れ物？」

エディソンは立ちどまつて考へた。そして先づ手をあげてそつと頭へ觸つてみた。仕合せと帽子はちゃんと頭の上に載つてゐた。今度は兩手を洋袴の隠しに突込んでみた。隠しには何一つ無かつたので、はつとなつたが、よく考へてみると、初めから何も入れてはなかつたのだ。

「何も忘れ物なんか、無いやうだが。」

「有るだらう。」友達はいくらか冗談のやうに言つた。「何か有る筈だが。」

「無いよ。何も無いよ。」エディソンは意地になつた。

「それぢやあそこを見給へ、大事の忘れ物が笑つていらつしやる。」

友達はエディソンの肩越しに停車場の方を指さした。發明家はのつそり後方を振り向いてみた。そこには此方向きに歩廊に立つてゐる花嫁の姿が見えた。花嫁はにこにこ顔で言つた。

「あなたはほんたうに思ひやりのあるお方ね。」

「失敬々々。」エディソンは慌てて後がへりをした。「つい考へ事に氣を取られちやつてね。」



こんな事は初めてだよ。これから吃度氣をつける。」

「そのお言葉も三日くらゐは利くでせうよ。さあ、御一緒に参りませう。」

花嫁は自分の存在を證明するやうに、わざと邪慳に良人の腕をとつた。發明家の花婿は引きずられるやうに躓いて行つた。

### 子役の粗忽

今道頓堀の中座で演つてゐる「故郷飾錦伊達織」伊達家奥御殿の場で、鶴千代丸に扮してゐる實川延寶と、千松に扮してゐる中村芝藝雀といふ子役が二人ゐる。

いつも奥御殿の場になると、子供心にも競争心を起して、一所懸命に藝を勵むので、觀衆も思はずほろりとさせられてゐるが、八日の演出には、子供の手には殆ど持ち切れない程の思ひもかけぬ大事件が起きた。

それは外でもない、延若の政岡が風爐先の屏風にひしと身を寄せて忍び泣きをしてゐると「稚けれども天然に太守の心備はつた」筈の延寶の鶴千代が、この頃の寒さに、つい堪へかねて小便がしたくなつた事だ。

鶴千代は政岡の方に氣をかねながら、押潰したやうな泣聲を立てた。

「阿母あ、小便がしたい。」

その日は河内家の總見があつたので、肝腎の阿母は皆と一緒に場に坐つて、惚れ惚れと吾兒の藝に見とれて、夢中になつてゐた。

「阿母あ、小便がしたい。」

鶴千代は二度までかう言つたが、つい堪へきれないで、ちやんと脇息に凭れたまま、袴のなかに小便を漏らした。袴は言ふまでもない事、美しい小切までしつとり濡れ徹つてしまつたが、鶴千代はそのまま平氣な顔で押通してゐた。

幕が縮ると、それに氣づいた母親は、延寶を連れて河内家の部屋へ謝りに行つた。

「親方、どうも相済みません。幕合に私が氣をつけるのを忘れたもんですから。」



かう言つて母親が闕際に額を押しつけると、延寶も小便に濡れた太守の着附のまま、叮嚀に栗のやうな小さな頭を下げた。

すると、先刻から子供心に朋輩の上を氣づかつて、こつそり後について來た千松役の芝藝雀はいきなり前へ飛び出して、鼠のやうに疊の上に小さくなつた。

「親方、かんにんしとくなはれや。小便したのは延寶さんやおまへん、私だすよつてな。」

芝藝雀は主従で勤めた舞臺の心持を忘れないで、部屋にかへつても、まだ主人の身代りにならうとしてゐるのだ。

それを聞くと、延寶は両手を拍つて感心した。

「よう言つた、芝藝雀。その心持、心持。その心持を忘れるんぢやないぞ。」

お蔭で芝藝雀は面目を施して歸つたが、延寶は今一人褒めなければならぬ子役のある事を忘れてはならない。それは粗相をした延寶で、小便がしたくなつても、じつと座を立たないでそのまま袴のなかに漏らして素知らぬ顔をしてゐたところに、たしかに五十四郡の太守たる貫目がある。せいぜい粗相をする事、する事。

## 人相見

若い時には誰しも自分の身の方向に迷ふものだが、アメリカの或る少年が、自分にはどんな職業が向いてゐるかしたらと、色々思案の末が、よくあるならひで人相見のところに出掛けて行つたものだ。

人相見は嚴つべらしい顔をして、少年に色々の事を訊いた。いづれも人相を見るのに聽いておかなければならぬ事かも知れなかつたが、中にはどうしてもよかりさうに思はれるやうな事までもあつた。

質問が済むと、人相見は少年の額を押へてみた。次にはまた頸窩ぼんのかぼを押へたりした。そして卓子に兩臂をついて、じつと頭を抱へて暫く考へ込んでゐたが、やつとの事で次のやうな検査を書いてくれた。



「貴殿は世間並の人とならるべし。卓抜のところは少しも見えず。才氣なければ、人の長たる事思ひもよらず。吾が力を恃むほどの自信もなし。かるが故に人の上に立たんなど、身に過ぎたる事に、志すべからず。萬づ吾が程を知りて、分に安んじなば身も安全なるべし。」少年はそれを讀んで、一時がっかりしたらしかつたが、それでもせつせと精を出すに越した事はない筈だと、一所懸命に仕事を勵んだ。すると、不思議な事に、ぐんぐん出世して、吾と吾が力を恃む事が出来るやうになり、安心して人の長になる事も出来るやうになつた。この少年は誰あらう、今米國造船總監として非凡の手腕を揮つてゐるチャアルズ・シユワツブその人である。

この書の著者が、ある時大和の久米寺に詣つたことがあつた。本堂の格子につかまつて内陣を覗き込んでゐると、後から

「どうだす、一つ手相を見せていただけまへんやろか。」といふ聲がした。振返ると、お札賣りの爺さんであつた。

私は掌を爺さんの鼻先につきつけた。爺さんは狗兒のやうにうそうそ嗅ぎ廻してゐたが、

「あんさん、よろしおまん手相が。縁談やつたら急ぎなはらん方がよろしおます、ことによつたら縣會議員になんはるかも知れまへんぜ。」

丁度その頃議員の選挙期だつたので、爺さんは思ひ出したやうにこんな事迄つけ足した。おかげで著者は見料として二十錢を奮發させられた。

## 桃の實

海軍——学校の校長F中將が、大橋乙羽がまだ存命中、道連れになつて一緒に米大陸を横切つた事があつた。

ちやうど桃の實の熟れる頃で、果物好きな乙羽は、汽車の窓から桃の實をしかたま購ひ込んで、次から次へと留度とんどもなく貪り食つた。そして口に残つた核子はちよつとしやぶつた後で、床の上に吐き出して素知らぬ振りをしてゐた。



それを見た乗合の亞米利加人はみんな不愉快な顔をした。なかにも婦人客は唇を邪慳に壓し曲げ、輕蔑<sup>さげす</sup>みきつた眼つきをしてゐた。幾度か西洋に渡つてあちらの風習を知り抜いてゐるF中將は、はらはらして乙羽に耳打をした。

「大橋君。君が桃の核子をみんな床の上に吐き出すので、毛唐め、あんなに機嫌を悪くしてよ。」

「なんだつて機嫌を悪くするんです。」

乙羽は桃を口一杯に頬張りながら訊いた。

「それがね、かうなんだよ。」

中將はわざと氣取つた口振りをして言つた。それによると、すべて西洋人は汽車のなかで果物を食べる折には、食べ残した核子は、一々克明に窓から外へ投げることにきめてゐる。投げられた核子は、土に落ちて芽を吹き、花を開いて、幾年か後には、鐵道の兩側は美しい花園となり、おまけに果樹園ともなるので、どれほど土地の人のためになるか知れないといふのだ。

「成程な。」

乙羽は腹の底から感心したやうな聲を出してゐたが、暫くすると、恥づかしさうにそつと手を伸ばして、床に吐き散らした桃の核子を、一つ一つ拾ひ取つては窓の外に投げ出した。旅行から歸つて暫くすると、F中將は乙羽から「米山歐水」といふその折の觀光記を受取つたが、別にあけても見ないで、そのまま本棚の隅つこに放り込んでおいた。すると間もなく乙羽も亡くなつてしまつた。F中將は記念の「米山歐水」を取出して、ちよつと表紙の埃をはたいて読みかけてはみたが、あまり興味をひかないので、そのまま打捨ててしまつた。すると、この頃になつて中將は自分の子供が、西洋人は汽車で果物を食べると、核子は皆窓から捨てる事になつてゐる。あちらに花園や果樹園の多いのは、その故だといふ事を話してゐるのをちよつと小耳にはさんだ。

「誰にそんな事を聞いたね。」

中將は吃驚しながら訊ねた。

「誰にだつて。ちやんと教科書に載つてますよ。」



子供は得意さうに答へた。

中將は慌ててその教科書を取寄せて見た。それには乙羽の「米山歐水」から抜書せられた文章が立派に載つてゐた。

「嘘だ、嘘だ。みんな俺の嘘からだ。」

F中將は早速文部省に係の人を訪ねて、その文章の取消を申入れた。

「ほんたうに窮屈な世間だ。嘘一つ吐けないんだからね。」

中將は文部省の玄關を出る時、獨言のやうに呟いた。——實際窮屈な世間だ。眞實の事が言へない世の中に、嘘が吐かれようわけはないのだから。

### 仲麿と背中合せ

東京は赤坂一つ木のT氏の邸を表口から入つて右に、高さ五尺ばかりの古い石碑がある。

碑の文字は雨風に打たれていくらか傷んではゐるが、誰の眼にも、

#### 安部 仲麿 塚

といふ五文字だとは直ぐにわかる。

仲麿は誰もが知つてゐる通り、唐土の空でビスケットのやうな乾いたお月様を見ながら、三笠の山に出でし月かも

と歌つた男である。ところが、この石碑は、もと仲麿の出生地だと言ひ傳へられてゐる大和の安部村にあつたのを、去年の秋どうした譯か奈良の古物商が買ひ取り、いくらか持て餘し氣味だつたのを、それを聞込んだT氏がわざわざ譲り受けたものである。

京都の嵯峨に俳人去來の墓がある。尖つた三角型の素朴な石で、舞妓の振袖にも包まれさうな小さな石碑である。ある時京都の出水邊に住んでゐる物好きな男が、この石碑を女房に見せたいからといつて、風呂敷を懷中にしてわざわざ嵯峨まで出掛けたものだ。女房の機嫌を取るためには、どんな事をも仕兼ねない男で、猫の子を嫁入らすやうに、去來をそつくり



風呂敷包みにして提げて歸る積りだつたのだ。ところが、途中で大粒な丹波栗をしこたま購ひ込んだので、ついそのままになつてしまつた。女といふものは、どんな人の墓よりも栗のきんとんの方を嬉しいがるものだといふ事を、その男はよく知つてゐたのだ。

T氏は玄關先を通るたびにその石碑を見て、

「何に使つたものかな。仲間の奴を、一つあつと言はせるやうな……」

と、いつもさう思つてゐたが、ある時芭蕉翁の句集で、「木曾どのと背中合せの寒さかな」といふ句を見て、覺えず膝を叩いた。

「さうだ、乃公の墓にしよう。仲鷹のと背中合せに乃公の名を彫りつけて、さて側面には、

仲鷹と背中合せの月見かな

とかうやるのだ。この趣向には大抵の奴が恐れ入るだらうて。」

T氏はさう考へつてからは、一日も早く自分の墓が拵へてみたくなつた。そしてまた一日も早く死んで、その墓の下から友達の恐れ入る顔を覗いて見たくてたまらなくなつた。

## 幸運兒

今はむかし、一七九一年の一月五日の午過ぎ、佛蘭西はセエヌ河の畔、オクソンヌといふところで、五人の衛戍將校が猿のやうにきやつきやつと輕燥はしゃぎながら、變な腰つきで氷すべりをしてゐた事があつた。

ところが、そのなかの若い將校の一人は、急に勢のない顔をして立ちどまつた。

「ああ、腹が減つた。僕は腹が減つて堪らないから、もう歸るよ。」

かう言ひ捨てて、その男は急いで歸り支度に取りかかつた。皆は慌てて引きとめた。

「そんなに急ぐなよ。今暫くしたら、僕達も一緒に歸るんだから。」

だが、若い將校は皆の言ふ事を肯かないで、滑り靴を脱ぎ捨てて、さつさと歸つてしまつた。腹の減つた身には、物を言ふのも大儀らしかつた。



「は、は。奴さん、またいつもの強情を出しをつたな。」

皆は若い將校の歸つた後で、陰口をききながら、勢よく氷の上を滑つた。巧く滑れる時は自分の身體を五サンチムの銅貨のやうにさへ思つた。

皆が有頂天になつて騒ぎ立つてゐる一刹那、どうした機みか、氷はばりばりと音を立てて割れた。そして四人が四人とも、その割れ目に陥ち込んで死んでしまつた。一足先に歸つた一人こそ、實際都合よく腹が減つたもので、さもなかつたら氷の裂け目に皆と一緒に銅貨のやうに滑り込んだに相違なかつた。その腹の減つた一人こそ誰あらう、後には佛蘭西皇帝にまでなつたナポレオン・ボナパルトであつた。

船 酔

パアシング將軍が、歐洲派遣の米國軍を引連れて大西洋を横斷してゐた時の事、海は將軍

の門出を祝福するやうに大きな肩を揺ぶつて笑ひ出した。その笑ひやうが餘り無遠慮だつたので、浪は船を玩具のやうに弄んだ。

船の中できやつきやつと輕燥いでゐた若い將校連も、いつの間にか横に倒れて、うんうんと呻き出した。なかに一人、船に、賭博に、おまけに軍にも、女にも、あまり強くないやうな顔をしてゐた士官が、海の荒れ始めから自分の船室へ潜り込んで、一向影を見せないのがあつた。パアシング將軍はわざわざ立つて、その士官の船室を訪ねて行つた。士官は船酔の果てが枕につかまつてしきりと穢い物を吐いてゐた。

「酔つたな。何か食べたがよからう。」

將軍は平氣な顔をして言つた。

「どう致しまして。」士官は瓜のやうな顔を涙と汗とでぐしよ濡れにして泣くやうに言つた。

「食べた物は、みんなもどしてしまふんです。」

「もどしたら、また食べる迄の事さ。食べては吐き、食べては吐きしてる間に、船も佛蘭西の港へ着かうといふものだ。」



將軍は命令のやうに言ひ捨てて、足音を曳きずりながら外へ出た。若い士官は蛙のやうに靈魂までも吐き出しさうに、またひとしきり身悶えした。

植民館の設立者として名高い米國のジェエン・アダムス女史が、ある時大西洋通ひの汽船に乗込んだことがあつた。その日も海は荒れてゐた。女史は船には強い方ではなかつたが、それでも二等室にゐた愛蘭土人の一人が、ひどく弱り込んでゐるのを見ると、もうじつとしてゐられなくなつた。すべて社會改良家といふものは、猫の餌を見ては直ぐその生活費を考へ、燕の巢を見ては家賃を訊かないではゐられない、世話好きの人達である。女史は苦しさに嘔吐してゐるその愛蘭土人の肩を抱へながら言つた。

「随分お苦しきさうですね、貴方のお腹は餘りお強い方ではないんですね。」

「私のお腹が弱いとおつしやるんですか……」愛蘭土人は涙の眼で女史の顔を睨んだ。「お腹が弱くて、こんなに吐かれるものぢやない。御覽なさい、あんな遠くにまで食物を吐き飛ばしてゐるぢやありませんか。」

### 美人の木乃伊

工學博士T氏は古代建築專攻の學者で、近頃は支那へ派遣せられ、大同府の千佛山や洛陽の龍門や、または支那五嶽の隨一と言はれる嵩山あたりまで出掛けて行つて、古物といふ古物は何一つ残さず搜し廻り、

「どうしても北魏隋唐となると、藝の冴え方が違つてゐるから偉い。大したもんですな。」と、涙を流さんばかりに喜んでゐる。

このT氏が、ある時支那の西域で發掘せられた木乃伊の鑑定を頼まれた事があつた。棺のなかには白絹で叮嚀に巻かれた屍體が横たはつてゐた。T氏は水蜜桃の皮を剝ぐやうな氣持で少しづつ白絹をめくつてゆくと、なかから顔を出したのは妙齡の娘で、目鼻立ちどこに一つ點の打ちやうもない大理石像のやうな美人であつた。T氏は學者となつてこんな美しい娘



の木乃伊を鑑定するよりも、いつそ放蕩息子となつて、生きたこの娘の唇に觸れたく思つたらしかつた。T氏は吸ひつけられたやうな眼をあげて、側の墓銘を見た。それによると、この女はさる大官の一人娘だつたが、流行病にかかつたので、その頃の慣習通り、まだ息を引取らぬうちに、生埋めにしたものだといふ事が判つた。

「かはいさうに生埋めにしたのださうな。」

T氏は深い溜息を吐いて、そつと眼がしらの涙を拭つた。T氏は日本には息のあるうちに生埋めにしてもいい政治家や學者のたんとある事を思つて、そんな習慣のないのをいくらか物足りないやうにも思つた。

T氏はいつ迄もいつ迄もじつと木乃伊を見てゐるうちに、どうも兩腕の位置が少しく面白くないのに氣がついた。

「折角の美しい木乃伊だ。今少し藝術的の恰好をさせなくつちや。」

口のなかで獨言を言ひながら、そつと兩腕に觸つてみた。兩腕は釘付にせられたやうに重かつた。女の腕は生きてゐるうちと同じやうに、亡くなつてからも學者などのためには、少

しも動かうとはしなかつた。

「どうしても動かないかなあ、もうちよつとの事で藝術的になるんだがね。」

T氏は女の美しい胸を見つめながら、口惜しさうに呟いた。——そのT氏に教へる。木乃伊の腕は學者の研究と同じで、今一息といふところで物になるのだが、えてしてさうならぬところが世間なのである。

## 老人の忠告

去年の三月頃の事、神戸女學院出の或る婦人が廣岡淺子女史を訪問した事があつた。西洋人の外は大抵の人に會はない事にきめてゐる淺子女史は、客が女學院出だといふので、ふと會つてみる氣になつた。英語が話せるのだつたら、大抵立派な人柄だといふのが女史の信條である。



客が座敷に通ると、女史は蘇格蘭の烏のやうに眞黒な洋服を着て出て来た。そしてだしぬけに變な調子の英語で話し出した。客は可笑しさが一杯なのを奥歯でじつと噛み堪へながらともかくも英語で返事をした。すると、女史の機嫌が急によくなつて来た。

「あなたは西洋人のお友達をお持ちかい。」

「いいえ、持ちません。」

「それはいけない。友達は西洋人に限る。私などはこんなに西洋人のお友達を持つてるよ。」女史はわざわざ立つて行つて、手文庫の中から横文字の手紙をどつさり持ち出して来た。

客が西洋人に友達を持つてゐないといふ事は、いくらか浅子女史の機嫌を悪くした。女史は急に日本語で喋り出した。人間といふものは、すべて込入つた事柄は、自分の國の言葉で話した方がいいものだ。

「近頃の女學校は皆よくない。女學院にしてからがさうだ。校長にお會ひだつたらよく忠告しておいておくれ。」

「まあ、そんな御親切がおあんなさるんだつたら……」客はいくらか冷かし氣味に言つた。

「あなたがかに言つて上げて下さいよ。さいはひ明後日は金曜日で祈禱會なんでございますから。」

「さあ、ぢかに私が言つてもいいが——」浅子女史は烏のやうにぶるぶると肩を顫はせながら、柱曆を見た。曆には三月——日と出てゐた。「まだ三月で、外へ出るのは寒くていけない。追つて六月にでもなつたら、一つ思ひきり忠告する事にしよう。」

廣岡女史に告げる。今は丁度七月だ。烏も裸で行水をする頃だ。老人が若い者に忠告をするなら今のうちの事だ。

### 煙草屋の小僧

先年米國のピッツバアグ市の或る煙草屋へ一人の紳士が入つて来て、

「やう、煙草を呉れ。」



と言つた。店先にゐた小僧は黙つて一罐を持ち出して來たが、それを手渡ししようともしないで、しげしげ紳士の顔を見詰めながら、何か言ひ出したさうにしてゐた。

紳士は氣味が悪くなつて、手袋をはめた掌でそつと顔を撫でまはした。小僧はたうとう切り出した。

「旦那さま、失禮ですが私をお備ひ下さらないでせうか。」

紳士は不思議さうに小僧の顔を見た。

「一體何になりたいと言ふんだな。」

小僧は巻煙草のやうに身體を真直ぐにした。

「私機械の方をやつてみたいんです。」

「機械係は熱くて苦しいもんだよ。」

「どんなに熱くたつて、苦しくたつて構ひません。」

小僧は巻煙草のやうに頭に火がついても、びくともしないやうな、しつかりした調子で言つた。

紳士は小僧の手から煙草の罐を受取つた。

「ところで、日當は一日一弗しか出せないが承知かな。」

「日當なんか幾らでもよござんす。」

小僧の熱心な顔色に紳士もつい動かされて、兎も角も世話をしてみようといふことになつた。で、まづ自分の監理してゐるカーネギー製鋼所に放り込んで置いた。

これは今から四十年ほど前の出來事だが、小僧はそれから汗と油とで眞黒になつてせつせと働いた結果、とんとん拍子に出世して、今では年收三百五十萬弗といふ米國でも指折の大物持になつた。その人こそ誰あらう、ベスレム製鋼會社の社長から米國管船局總裁の位置に上つたチャアルズ・シユワツプである。

歐洲戦局を支配したものは米國の増援隊であり、その増援隊を活躍させるのは米國の造船能力にあるのを思ふと、獨逸膺懲の鍵は、とりも直さず、四十年の煙草屋の小僧の垢染んだ掌に握られてゐる次第なのだ。——忘れてゐたが、シユワツプは獨逸系の米人である。



## 豚に脱帽す

獨逸の軍隊が、破竹の勢で東部佛蘭西に攻め込んだ時、そこらに住んでゐた佛蘭西の住民は、豫てから獨逸人が吝つたれで、慾深で、有る程のものは搔つ拂はずにはゐられない癖があるのを知つてゐるので、てんでに財産をかくまふのに智慧を絞つたものだ。

そのなかに貧乏な農夫が一人あつた。財産といつては夫婦が身に着けるものの外に、豚が一頭ゐたに過ぎなかつた。

「どうしたものだらうて。獨逸の奴め、豚がゐると知つたら、吃度盗み出さうとするにきまつてる。」

農夫は豚の前に立つて、手を拱いて考へ込んだ。お慈悲の深い神様は、貧乏なその男のために取つて置きの良い智慧を恵んで下さつたので、農夫ははたと手を拍つて喜んだ。

農夫はいきなり豚を叩き殺した。そして馴れた手つきで、さつさとそれを切り開いた。腹の中には日本の實業家などの持つてゐさうな、いろいろ變な物があつたが、農夫は綺麗に水で洗ひ落してしまつた。豚はトルストイ信者のやうに清淨な身體になつて横たはつた。

農夫はその豚の死骸に、頭からすつぽりと自分の女房の服を着せて、叮嚀に寢床に寢させた。そしてその周圍に蠟燭を點して、精々悲しさうな顔をしてゐた。

暫くすると、激しい靴音がして、獨逸兵が扉を撥ね飛ばすやうな勢で入つて來た。農夫は兩手の掌に填めてゐた顔を大儀さうにあげた。獨逸兵は吠えつくやうな獨逸語で何か訊いたが、農夫は黙つて頭をふつた。

見ると、寢床の上には女の着物を被つた死骸らしいものが轉がつて、枕もとには蠟燭さへ點されてゐた。

「死人だ。ことによつたら女房さんかも知れなく。」

と思つた兵卒は、胸で十字を切つて、ちよつと帽子を脱いだ。そして氣の毒さうな顔をして黙つて出て行つた。



農夫はほつと息をついた。着物を撥ねのけてみると、豚は心臓も腸も持つてない癖に、鐵面皮にも平氣で足を踏み伸ばしてゐた。

## 悟道

近頃碧巖録とか無門關とかいつたやうな禪家の書物に、所謂悟道を商賣にしない、素人の學者、求道者が飛び込んで、新しい解釋を試みようとしてゐるのは、面白い現象である。

鳥居得庵といへば、禪機の鋭さにかけては、その頃の居士仲間の隨一であつたが、ある時その居士の玄關へ立つて、牛のやうな太い聲で案内を頼む者があつた。

取次の書生が出てみると、玄關には、互で拵へたやうなお粗末な坊さんが一人衝立つてゐた。

「拙僧は北國の雲水でござるが、得庵先生御在宅なら、御意を得たいと思ひまして……」

坊さんはかう言つて、人形のやうにぎくりと頭だけを下げた。その風が餘り可笑しかつたので書生は思はず笑はせられた。

「折角のお訪ねでござりますが、主人は昨今所勞中で、どなたにもお目に懸りません。」

大抵の客は、皆この口上一式で追ひかへす事になつてゐるので、書生は早口にすらすらと言つてのけた。

お粗末な坊さんは、汗ばんだ額へ掌をやつて、じつと考へ込んでゐたが、急に獸のやうな悪意のある眼で書生の顔を見た。

「實は居士にお目に懸けたいと思つて、天よりも大きい編笠を持参いたしてござるが、いかが取計らひませう。」

蛇の目の雨傘だつたら、書生は自分のにする事を知つてゐたが、編笠では使途に困つた。で、とにかく奥へ入つて事情を話してみると、居士は狼のやうな顔に、にやりと薄笑ひを浮べた。

「どこぞ其邊そこいらに捨てておけと言つてやれ。」



書生が玄關へ出て教へられた通りに言ふと、坊さんは背に括りつけた編笠の紐でも解くやうな真似をして、そのまま出て行つた。書生が入つて譯を訊くと、居士はけろりとした顔で言つた。

「乃公は何も知らんよ。編笠を持つて來たといふから、捨てておけと言つた迄ぢやないか。」

### 入場料の儉約

アルマ・グルック女史といへば、米國で名高い高調子ソプラノの歌手で、歐羅巴の本場仕込でなくて、グラント・オペラの一流株になつたのは、女史が皮切だといふことだ。

いつだつたか、女史がミシガン州の或る市に演奏に出掛けた事があつた。何しろ名高い歌手が顔出しをするのだといつて、市はひつくりかへる程の騒ぎだつた。一體音楽といふものは、いろんな藝術のなかで一等解り難いものだが、あれを解らないといふと、馬に見比べら

れる心配があるので、大抵の人は辛抱して解つたやうな顔をしたり、面白いといつて騒ぎ廻つたりするのだ。

演奏のある日の午過ぎ、アルマ・グルック女史は好きな菓子を買ひに大通の店に入つて行つた。番頭は朋輩を相手にしきりとその晩の演奏會の事を噂してゐた。

「演奏會といへば、大した人気ださうぢやありませんか。」

女史は何喰はぬ顔をして口を出した。番頭は初めて氣がついたやうに、身装のりうとしたこの婦人客を見た。

「どうも素晴らしい人気でございますよ。」

「貴方も今晚はいらしつて？」

「へい参りたいとは思つてゐるのでございますが——」番頭はちよつと頭へ手をやつた。

「實を申しますと、音楽は餘り好きでもございませんが、唯噂の高いアルマ・グルックさんといふ方のお顔を見たいと思ひましてね。」

「それぢや、眼をあけてようく御覽よ。」女史はいくらか中つ腹の氣味で、鷲鳥のやうにぐ



つと首を前に突き出した。「そして入場料だけは儉約しとくわさわ。」  
番頭は呆氣に取られて、じつと眼を皿のやうに見張つた。——で、言はれた通りに入場料だけは儉約をする事にしたさうだ。

## 座頭と花形俳優

松本幸四郎——といつても、帝劇の舞臺に立つてゐる今の幸四郎ではない。ずつと昔の幸四郎である。——が、ある時芝居の初日はねて家に歸つて來た。そして長火鉢の前に坐つて、女房を相手に酒を飲みながら今日の舞臺の出來を話してゐた。  
すると、表の格子戸を勢よくがらりとあけて、内弟子の一人が歸つて來た。弟子は長火鉢の前の師匠を見ると、いきなり浮いた調子で二三度自分の頭を叩いた。

「おかみさん、お喜びなせいまし、今度の芝居に内の親方の評判ときたら、それはそれは素

敵なものでございませ。わつちやあ、氣に懸つて仕方がねえもんだから、今も今とて打出しの見物衆に交つてね、皆の評判を聞いて歸つたのでございませ、十人が十人『どうだい、今度の幸四郎の出來は』と言つて、褒めちぎつてまさあ。」

弟子はわざとらしく雀のやうな恰好をして踊つてまで見せた。幸四郎はそれを聞くと、急にむづかしい顔をした。そして弟子のふざけた振りには見向きもしないで、ちびりちびり盃の縁を嘗めてゐた。

「なんだつて、そんなに不機嫌な顔してるの。」女房は繊細な手先で銚子の加減を見ながら心配さうに言つた。「今聞けば、お前さんの評判が一番好いといふぢやないの。」

「ああ、困つたな、今度の芝居はきまつて不入りだわえ。」

幸四郎は女房の言葉はまるで耳に入らぬらしく、獨言のやうに呟いた。

「え、不入りだつて、今度の芝居が。」女房は咎め立てをするやうに怖い目つきをした。「冗談もいい加減にしてお置きよ。今日は初日だつてえのに。縁起でもな。」

「お前達には判らな。」



幸四郎は盃を猫板の上に置きながら、弟子の顔にじつと眼を見据ゑた。弟子はいつにない師匠の不機嫌に、さつきのふざけた真似とは打つて變つて神妙に鼠のやうに小さくなつてゐた。幸四郎はぽつりぽつりとした口調で譯を話した。その言葉によると、今度の芝居の花形は、誰が何といつても半四郎と三津五郎の二人だ。この二人が評判がよかつたら、芝居は大入りにきまつてゐる。それなのに自分がそんなに評判を立てられるといふのは、この二人に好い點がないに相違ない。座頭役、敵役の評判では見物は來ないものだといふのだ。

今の鷹治郎や歌右衛門なども、よくよくこの言葉を味はつて貰ひたい。そして精々一座の花形俳優に花を持たすやうに振舞つて貰ひたい。これはひとり俳優に限つたことではない。原敬氏なども自分が評判を取らうとしないで、同じ閣僚の花形を引立てるやうにしたら、内閣も割合に無事に持續ける事が出來よう。シヨペンハウエル曰く、好い俳優はよく端役をしてゐるものだ。

## 女商人

蘆花徳富健次郎氏が、ながい間の修道的閑居から、久しぶりに柴の扉を明けると、いろいろな訪問客が毎日ぞろぞろと詰めかけ出した。そのなかに、氏の原稿を貰つて一儲けしようと思論もくろみを立ててゐる出版業者も幾人か交つてゐた。

さういふ輩のなかに、たつた一人の女商人があつた。幾度か面會を謝絶ことわられても、性懲りもなくまたやつて來るので、徳富氏も流石に氣の毒になつて會つてみる事にした。

その人は兩國橋詰の或る書肆の女主人だつた。

「お忙しいところを、お邪魔にあげまして相済みませんが……」女商人は叮嚀にお辭儀をした。頭の下げやうが、どこか婦人雑誌の口繪のそれによく似たやうな點があつた。「先生のお書きになつたものを、一度私どもで出させて戴きたいと存じまして。」



「私の書物が出版したい？」徳富氏はこの頃鬚を剃り落したばかりの頤を撫でながら、子供のやうなくりくりした目つきをした。「何故ですか。」

「お金が儲けたいんです。先生の御本を出させて戴きますと、お金がどつさり儲かりますやうに承りましたから。」

女商人はかう言つて後れ毛を撫で上げた。

「なぜ、そんなにお金が儲けたいのかね。」

徳富氏は不思議さうに訊いた。女商人は答へた。

「商賣をもう一層手広くやつて行きたいと思ひますし、それに妙齡の娘も一人ございますもんですから。」

「娘さんがおありだつて。」徳富氏は牝雞の羽の下に卵を一つ見つけた折のやうに聲をはずませた。「それぢや原稿をあげない事もないが、その代りに茲に一つ条件がある。」

「条件とおつしやいますと……」

「あなたも知つてゐるだらうが、麴町に——堂といふ書肆がある。あすこの主人に娘さんを

娶はさないかね。さうすると、きつと私の原稿をあげるが。」

徳富氏はにこりともしないで言つた。——堂の主人といふのは、浅草の観音様を自分の本尊として毎夜お詣りをする外には、何一つ浮いた事もなく、四十の今日まで童貞を守り通して來た風變りな商人で、徳富氏とは長い間の近づきであつた。

「思召しは有難うございますが、いづれよく考へました上で。」

女商人はかう言つて歸つて行つた。そしてそれ以來二度と原稿を貰ひに粕谷の村へ出て來なくなつた。

その後徳富氏が兩國橋を通ると、橋詰の書肆の店で、見覚えの女商人は客を相手にせつせと働いてゐたさうだ。——よい考へで、お金が儲けたかつたら、働くに越した事はない。

## 女房の手紙



亭主といふものは、女房を里歸りさせるか、それとも自分が遠くへ旅立ちでもしなければ滅多に女房の手紙を読む機会に出會さない。だから、もし自分の宅で女房から手紙を投げつけられるやうな事があつたら、大抵の亭主は、小鳥のやうに顛へあがるにきまつてゐる。

米國は紐育の或る大會社の社員が、先日、出勤時間が來たので、慌てて家を飛び出さうとすると、戸口で女房に呼びとめられて一本の手紙をつきつけられた。

「あなた、これを會社へお着きになつてから読んで見て下さい。途中で御覽になるんぢやありませんよ。」

女房はいつになく眞面目な調子で言つた。

亭主はぎよつとして手紙を受取つた。そして何か訊き返さうとして口をもぐもぐさせてゐたが、ふと時計の針が目に入ると、そのまま慌てて飛び出した。そして途々手紙の封を切らうとして、幾度かポケットに手を突込んだが、その都度女房の言ひつけを思ひ出して、それなりポケットの奥へ押込んでしまつた。——實際女房の言ひつけと、藥の處方箋とは言葉通りに解釋した方が、男にとつて危険が少かつた。

會社の入口に入ると、男は急いで手紙の封を切つて讀み下した。

「貴方に御心配を掛ける事だとは知つてますが、私としてはお話し致さなくては濟まされません。それは私の義務なんですからね。私は先日中から、こんな事になるだらうと思つてましたが、今日までじつと辛抱して來ました。ところが、たうとう大變な事になりました。私はもう隠してばかりはゐられなくなりました。いよいよあけすけに申上げますから御免下さい。貴方はそれをお聞きになると、吃度顛へ上つておしまひになります……」

「いよいよお互ひの身の破滅だ。大變なことになつたもんだ。」

と思ふと、男は髪の毛が逆立になるやうに思つた。そして急いで後を讀み繼いだ。

「あなた、石炭がもう皆無になりましたのよ。どうか正午までに宅に届けて呉れるやうに電話をお掛け下さいな。——吃驚させて濟みませんが、かうでもしなけりや、貴方がお忘れになると思つてね。」

男は吻と息をついた。そして早速電話をかけて石炭を注文した。で、ものの十分も経つと男は急に元氣づいて、石炭が無くて女房がゐると、女房がゐなくて石炭がうんとあるのと



どつちが男にとつて暖かだらうかなどと、そんな大それた事を考へ出した。

## 女房の通辯

××商事會社の重役M氏は、ながく米國へ渡つてゐて、あちらで會社の地位をしつかりと植ゑつけたのは、全くこの人一人の骨折だと言はれてゐる人である。それだけにM氏自身も米國にはかなり深入りしたと見えて、夫人には、髪の毛の金色な米國婦人を迎へてゐる。結婚をした男といふ男は、大抵みなアダムを羨ましがるものだ。なぜといつて、彼にはイヴの阿母おふくろといふものがゐて、絶えず口うるさく世話を焼く心配が無かつたから。實際男にとつて、女房の里方のおせつかいほど小うるさいものはないが、それを思ふと、M氏が米國婦人を妻に迎へて歸つたのは惻巧な仕方だつた。

女房の里方が日本に無いのを忘れないM氏は、ちよいちよい夫人を連れて、あちこちと旅をする。そして何處あてどと當所もない折には、日光へ行く事にきめてゐる。日光と藝者とは西洋人にとつて日本の二大驚異であるが、藝者は夫婦者にとつては、山よりも險呑な所が多いので、M氏はそれで日光へ行く事にきめてゐるのだ。

ある時日光へ行つての歸途に、夫人は誰かに買つて歸るつもりで、土産物を賣つてゐる一軒の小店へ入つた。M氏は葉巻を啜へたまま、後からのつそりについて行つた。夫人は番頭が取出して來る色々な土産物を弄くりまはしてゐたが、そのなかから通草蔓あけびかづらの手籠を二つ三つ買ひ取つた。

夫人は財布を出して言はれるだけの金額を拂つた。その金は基督教信者のM氏が、聖書に書いてある事と書いてない事とを巧く按排して商賣するので、儲かつた金の一部分であつた。M氏は相變らず葉巻を啜へたまま、夫人の後からのつそりと店を出ようとした。すると後から低聲こごゑで、

「もし、もし。」

と呼ぶ者がある。見ると番頭だ。番頭はたつた今夫人に見せた叮嚀な素振りとは打つて變つ



た氣取つた態度で、

「僅かですが……」

と言つて、幾らかの金錢をM氏の掌に握らせた。

M氏は會社のため使ひ減らして、近頃いくらか軽くなりかけた頭を傾げた。

「ははあ、俺を通辯と間違へたな。女房がアメリカ人だもんだから。」

さう氣がつくと、氏は軽く頷いて、その小錢をそのまま自分の懷中に納めてしまつた。そしてこんな不意な儲けをするのも、自分の女房の見立が善かつたからだと思つて、満足さうに煙をばつと鼻の穴から吹き出した。

## 百圓札

國民黨出の政論家U氏は、多くの議論家と同じやうにいつも貧乏である。いつだつたか氏

の家に黨の犬養毅氏が訪ねて來た事があつた。犬養氏は劍術使のやうな凄い眼つきをして、狭いU氏の宅を物珍しさうにきよろきよろ見廻してゐた。

そのかへり途に、犬養氏は國民黨本部へ立寄つた。そして乾魚のやうな瘦せた體軀をぐたりと椅子の上を下すと、居合はせた黨員の誰彼を見て言つた。

「蝸廬といふ語があるね。僕も書物のなかでは、よくこの語に接してはゐたが、今日は眼前にその蝸廬といふものを見て來たよ。」

「へえ、どんな人が住んでゐました。」

黨員の一人が不思議さうに訊いた。

「國民黨員が住んでゐたよ。名前はU——と言つたつけ。」

犬養氏は劍術使のやうな眼尻に皺を寄せて笑つた。

そのU氏が、ある時國民黨本部でぶつぶつ言つてゐた事があつた。

「柏原文太郎つてほんたうに失敬な奴だ。僕はあんな非紳士的な男をまだ見た事がないよ。」  
「非紳士的つて、どんな事をしたんだい。」



居合はせた黨員の一人が訊いた。

U氏は眼をくしやくしやさせた。

「それを聞いたら誰だつて怒るよ。」

「どんな事をしたんだい。」今まで背を向けて何か考へてゐたらしい同じ黨員の大内暢三氏がこつちに振向いた。「柏原がそんな不都合をしたのなら、僕が君に謝らせてもさう。」

「不都合だとも。ひどい不都合さ。」U氏は泣き出しさうな顔をして言つた。「彼の男は僕の眼の前で金を勘定したんだよ。しかも百圓札でね。」

「札勘定をしたんだね、百圓札で。」皆は顔を見合はせた。「そりや成程柏原が悪い。君にそんな物を見せるなんて。」

皆は柏原氏が悪いときめてしまつた。實際それはよくない。貧乏人に百圓札を見せつけるなんて、富豪に短銃をおつつける以上に罪が深い。何故といつて、富豪は懷中に手を突込んで相手を宥める術を知つてゐるが、貧乏人は赫となるより外には仕方がないのだから。

### お祖母様と黒狸々

最近西部戦線で、獨軍の砲弾の破片に撃たれた佛蘭西娘の一人が、巴里の病院に收容せられた。傷は程なく癒えたが、困つた事にはすっかり記憶を失くしてしまつて、何を訊いても返事一つ出来なかつた。

「お父さんの名は何といふの。」

醫者は猫のやうな物柔らかな聲で訊いた。娘は睫一つ動かさうとしなかつた。

「それぢや、お母さんは何といふの、覚えてゐるだらう。」

醫者は娘の顔を覗き込むやうにして訊いた。娘はつんと澄ましきつて外方そとほうを向いた。

醫者はなんとかして口を利かせたいものだ、頭を絞つて色々の手段を試してみたが、小娘は髪の毛一つ動かさない、すました顔で、石のやうに黙りこくつてゐる。かうしてさんざ



焦慮しぬいた末、

「馬鹿！」

と、一聲喚きでもしたなら面白かつたのだが、小娘は實際醫者の馬鹿なのを知らなかつたかして、いつ迄も黙つたままであつた。

醫者はたうとういい事を考へついで、小娘を動物園に連れて行つた。人間に出来ない事で動物には手もなく出来る事がよくあるものだ。小娘は獅子を見た。虎を見た。新聞記者のやうに忙しさうにしてゐる豹を見た。辯護士のやうにしやべくつてゐる小鳥を見たが、何一つ興味を惹かなかつたらしく、相變らず生真面目な顔を仕續けてゐた。

失望した醫者は、最後に小娘を連れて黒狸々の檻の前に立つた。狸々は手に食物の一片を持つて、お婆さんのやうに止木の上に、ちよこなんと坐つてゐた。實際ぺたんこな鼻の恰好から、黒味がちな圓まつちい眼は、お婆さんにそっくりだつた。

小娘は狸々を見ると、いきなり檻に駈け寄つた。そして獸の唸るやうな聲で、

「お祖母ちゃん、お祖母ちゃん……」

と呼び立てながら、懐かしさうに顔を檻に擦りつけた。狸々はそれを見ると、自分が親身のお祖母さんでもあるやうに、止木からのつそりと降りて來た。そして檻の中から手を伸ばして娘の肩を撫でた。娘は嬉しさうにきやつきやつと輕燥ぎながら、色々な事を狸々に話しかけた。狸々はまた黙つて小娘のおしやべりに耳を傾けてゐたが、暫くすると、娘をいたはるやうに手に持つた食物の一片をそつと呉れてやつた。

それ以後啞のやうだつた小娘は、また物を言ひ出した。だが、話す事といつたら唯もうお祖母さんと、黒狸々の事ばかりである。

## 婦人記者

ある秋、徳川家達公が夫人と一緒に關西旅行をしてゐた時の事、某新聞の婦人記者が、汽車訪問に神戸驛から同じ客車に乗込んだ。禮儀正しい公爵夫人は、つましやかに二言三言

婦人記者



記者の間に答へてゐた。

先刻から少し離れた客席で、その日の新聞紙に読み耽つてゐたらしい公爵は、ちらと婦人記者の顔を見るなり、不思議さうに二人の會話に聴耳を立ててゐたらしかつたが、暫くすると、読みさしの新聞を手に持ったまま、公爵夫人の側にすり寄つて來た。そして重々しい聲で口を切つた。

「あなた婦人記者かな。」公爵はしげしげと女記者を見廻した。「社にはあなたのやうな方が幾人もゐられるのかな。」

婦人記者は紅雀のやうにちよつと嬌態をした。

「はい、幾人もいらつしやいます。」

その實はたつた一人しかゐなかつたのだが、婦人記者は將軍家といふものは、往時むかしから本當の事を聞き馴れないものだといふ事を思つて、ついちよつと掛値を言つてみたのだつた。

「ふむ。」

公爵は上品な鼻を笛のやうに鳴らして、そのまま黙つてしまつた。

米國にゼエムス・リレエといふ詩人がゐる。ある時ポストンへ出掛けて行つてホテルへ泊ると、すぐに電話がかかつて來た。出てみると、相手はなにがし新聞社のジョオンス嬢といふ婦人記者だつた。

婦人記者は美しい聲で、この文人がポストンに來た用向きから、その最近の作物や生活迄こまめに聞き質した。リレエは叮嚀に一々それに返辭をした。すると、最後に婦人記者は訊いた。

「昨今奥様はどちらにいらつしやいます。」

「妻ですか。妻なら多分この電話の片つ方に懸つてるかも知れませんよ。」

詩人は世界の端までも聞えるやうな聲で返事をした。すると、矢庭に受話器を敲きつけるやうな音がして、電話は切れてしまつた。

リレエは聞えた獨身者である。



## 三哩の言語

英軍が今度の戦争で発明した新しい武器に、龜の甲のやうな“Tank”があるのは、知らぬ人もあるまい。英語ではたつた四文字で出来てゐる此の戦車が、獨逸へ行くと Schützen-gnabenvernichtungsgautomobil といふ、おそろしく長い名前に變つてゐる。獨逸人は何によらず鼠の尻尾のやうな長い名前をつけるのが好きな國民である。

だが、英語にも随分長い言葉がある。英語で一番綴りの長い語は何だらうといふ事は、むかしからよく無駄話の材料にせられたもので、ある人は、

“Disproportionableness” といふ二十一文字で出来てゐるのが一番長いといふと、いや、さうぢやない、その外にまだ、

“Disestablishmentarianism” といふ二十四文字で出来てゐる語もあるといつて議論したものだ。

科學者がよく拵へるお手製の複合語には “Dichlorhydroquinonedisalphonic” といふ卅文字で出来た語もあるが、しかし語の製造にかけては、どんな科學者も小説家には敵はない。チャアルズ・キングスレエの「ウオタア・ベビス」といふ子供の讀み本を覗いた事のある人は、もつともつと長い、まるで蛇のやうな語に出會して、ぎよつとした事がある筈だ。その語は、

“Nec-obione-paleont-bydrockthon-anthropopithekology” といふ四十七文字で出来てゐる語だ。もしか一息にこの語を發音する人があつたなら、褒美として獨逸帝國を半分進上しつゝさう。

洒落好きな和田垣謙三博士は、大學の教室で學生を前に、英語で一番長い語は何だとよく訊いたものだ。學生が返事に困つて顔を見合はせてゐると、博士は満足さうににやりとして、「Smiles だよ。SとSとの間が一哩あるぢやないか。」と言つて、聲を立てて笑つたものだ。



だが、それは博士の考へが足りなかつたからで、英語にはもつと長い語がある。ほかでも

“Beleaguered”

と云ふ語は Be と red との間が一リイグある。一リイグは約三哩の長さである。

### 林檎の冤罪

エデンの花園で、蛇に欺かれてイヴが食べた果實を、大抵の人は林檎だと思つてゐるらしいが、それは大きな間違ひで、あの果實が林檎でなかつたのは、誰よりも私がよく知つてゐる。

歴史家の考證するところに據ると、エデンの花園といふのは、たしかにバビロニヤの事だつた。ところが、バビロニヤには林檎といふものが無かつた。丁度お爺さんの頭に髪の毛が

無いのと同じやうに。

だが、よく調べてみると、舊約聖書には、何處にもイヴが林檎を食つたといふ事は載つてゐない。唯樹の實を食つたといふ事だけは確かに出てゐる。聖書學者の説によると、樹の實といふのは、

“Fructum”

といふ語だつたが、いつとなくそれが、

“pomum”

といふ語に書き更へられてゐた。“pomum”には普通の樹の實と、林檎と、二つの意味がある。いつの間にかイヴが食つたのは林檎だつたといふ事になつたのだ。

林檎にしてみれば、いい迷惑な話で、人間墮落の原因がイヴの食つた樹の實にある以上、顔を眞赤にしても、この點だけは言ひ争つて置かなければならぬ。唯林檎には口がない。そして友達に辯護士もゐなかつたので、今日まで黙つてゐたのに過ぎなかつた。

さきの章で、英語で一番綴りの長い語の事を言つたが、ここに林檎の冤罪を雪いだついで



に、世界中で一番長い名前をお知らせする。それは英國の洗濯屋アアサア・ベツバアといふ男の一人娘の名前で、附けも附けたり、

Anna Bertha Cecilia Diana Emily Fanny Gertrude Hypatia Inez  
Jane Kate Louisa Mauda Nora Ophelia Peper Quince Rebecca Sarah  
Teresa Ulysses Venus Winifred Xenophon Yetty Zeus

といふ長つたらしいものだ。アルフワベットが順々に頭文字に置き列べてある所がちよつと面白。

### 名香 大内山

こなひだ東京美術倶楽部で行はれた水戸家の賣立會には、色々數寄者の眼を聳てさせる物が、それぞれ素晴らしい價で取引せられたやうであつたが、そのなかに香木大内山が七萬一千

一百圓で、大阪の戸田の手に落ちたのにはちよつと驚かせられた。

大内山といへば、目方が百七十匁に過ぎない香木である。アメリカ人臭い物の見方をするやうだが、一匁ごと四百圓強となる勘定だ。人間の靈魂が胡桃のやうに安く取引せられる日本では少し桁はづれである。

この大内山こそ、名高い奈良東大寺正倉院の蘭奢待と同じ香木なのである。蘭奢待といへば、むかし西蕃から渡來した黄熟香を、時の帝聖武天皇が蘭奢待の三字に寺の名を入れて、そのまま東大寺の寶藏に納められた稀代の沈香で、正倉院の目錄によると、重量二貫五百目、長さ五尺二寸、本口周り三尺九寸、本口直径一尺四寸、末口周り一尺五寸、末口直径七寸といふ事だ。

この香木は、朝廷からその時々功臣に賜はつた例があつて、足利尊氏は一寸八分を切り取つた。寛正六年には義政が切り取つた。元龜三年には信長が一寸八分を、慶長七年には家康がまた切り取つた。家康がいくら切り取つたかはよく知らないが、名代の狸爺の事だからうづれは古例の一寸八分より餘分にたと切り取つて、その一部が今度七萬何千圓といふ事



になつたのかも知れない。

かういふ名香になると、香聞をすると嗅覺が痺れてしまつて、しばらくは物の役に立たなくなる。

そんな鼻の痺れを治すのには、外にまた結構な名香がある。不思議な事にその名香は一匁四百圓よりずつと廉いが、人間のする事には、何かと手抜かりの多い世間だから、そこに氣のついた人は、早くこの名香の買占をやつておく事だ。それは外でもない、臺所の隅つこにある糠味噌の匂である。名香で痺れた鼻の感じは、糠味噌の酸っぱい匂を嗅ぐと不思議によくなる。さういふ理由から糠漬の事を香の物といふのだ、と香道の人は昔から言ひ傳へてゐるが、多分そんな事かも知れない。

### 各國元首の收入

アメリカといへばあの通りの大金持の國だから、あすこの大統領は定めし素晴らしい俸給を取る事だらうと、大抵の人は思つてゐるらしいが、打明けていふと年俸七五・〇〇〇弗と出張旅費年額二五・〇〇〇弗を受取るに過ぎない。こんなぼつちりした俸給では、定めし生活も難しからうといふ譯でもあるまいが、白聖館の家賃だけは、別に取立てない事にしてある。

英國皇室の費用は、これまで年額三・一〇五・〇〇〇弗といふ事になつてゐたが、これだけでは逆も足りないといふので、最近議會の協賛を経て一年に六五・〇〇〇弗づつ増額する事になつてゐる。

今は廢帝の獨逸皇帝は、あの通り八方に手を延ばしたので、入費も従つて多かつたと見えて、皇室費の事ではいつも不足を言つてゐた。尤も獨逸帝國の皇帝としてはきまつた報酬といふものはなく、唯年額六五・〇〇〇弗の收入があるに過ぎなかつたが、皇帝は別に普魯西王として年額三・一五〇・〇〇〇弗といふ收入があつた。それでもまだ十分ではないと見えて、皇帝は話が金錢の事になると、いつも「足りない、足りない。」と言つて歎なげしてゐた。

伊太利の王室費は三・二〇〇・〇〇〇弗といふ事になつてゐるが、五六年このかた、經費



多端で不足がちだといふ事を聞いてゐる。そのほか歐洲各國の王室費では西班牙のが一・八五〇・〇〇〇弗、白耳義のが八七五・〇〇〇弗、丁抹のが三四五・〇〇〇弗、和蘭のが五二五・〇〇〇弗といふ事だ。

かういふ元首連に比べて、最も裕福だつたのは露西亞の廢帝で、莫大な私有財産をもつてゐたのみならず、皇室費もまた殆ど無類で、年額八・一七九・〇〇〇弗といふ高に上つてゐたのを思ふと、今の貧しい、不自由な生活が氣の毒でならない。

佛蘭西の大統領は年俸二四〇・〇〇〇弗で、交際費とか出張旅費とかも、みんな此のなかから支辨する事になつてゐる。——これで見ると、一番金持の多い米國の大統領が、一番懐加減が寒い勘定になる。

## 木堂と湖南

自分の黨員を減らす事にかけて、一種の天才を持つてゐる犬養木堂も、書物だけはどんどん買ひ殖やす事が好きらしい。

犬養氏が長年の間、閑暇と鑑識にまかせて購ひ集めた書物が、二階の一室にぎつしり詰つた時、氏は目尻を皺くちやにして喜んだが、それを見てたつた一人そつと溜息を吐いた人がある。他でもないそれは犬養氏夫人であつた。

ある日のこと、犬養氏が朝食の味噌汁を吸つてゐると、夫人が側から呼びかけた。

「あなた、天井が危かありますまいか。」

犬養氏は、きよとんとした眼つきで夫人の顔を見た。

「天井がどうしたと言ふのかな。」

「危かなからうかとうかがつたんですよ。」夫人は心配さうな眼をして天井を見た。「あんなにぎつしり書物が載つかつてるんでございませう。ひよつとすると梁が折れやしないかと思つて。」

「まさか。」



犬養氏は聲を立てて笑つた。そして女といふものは、詰らぬ心配をするものだと思つた。こんな話が取交はされてから、ものの十日も経たぬうち、犬養氏方に出入りの古本屋の店では、二階に積み重ねた書物の重みで、天井の梁が折れて、店にゐた亭主と番頭とは、その下敷になつて、したたか脊骨を痛めた事があつた。

「そら、御覽なさい。用心しないと、宅でもあんな事が起きないとも限りませんよ。」

夫人はこの機會を取外さなかつた。書物といふものは、人の頭を悪くするばかりか、どうかすると脊骨を折る事もあるものだと思つた犬養氏は、夫人に説きつけられて、澁々書庫を建てる事にした。

「これでもう天井の落ちる心配もなくなつた。」書庫が出来上ると、犬養氏は夜着のなかで、安心して蛙のやうに兩足を踏み伸ばした。「だが、内藤(湖南)の宅は劍呑だな。あすこの二階には、俺とこよりもつと澤山な書物が詰つてるんだからな。」と眼をばちくりさせながら、天井を見つめてゐたが、「今度内藤に會つたら、なんでも一つ庫を建てるやうにすすめてやらう。」

内證で内藤氏に知らせる。天井を落すまいとするには、なにも書庫を建てる必要はない。時々二階にある書物を賣拂ふ事だ。書物を賣るといふ事は、書物を買ふのと同じやうに、人間を賢くするものである。

## 戀病ひ

中村雀右衛門に次いで、尾上多見藏の襲名があり、春の道頓堀では嵐徳三郎が、亡父の二十五年忌を機に、四代目璃寛の名跡を相續するとの噂がある。行き詰つた俳優連が襲名によつて人氣を新しくし、それと同時に自分の技藝にも一飛躍を企てようとするのは、あながち間違つた仕方ではない。

徳三郎の父親、三代目璃寛は鏡山のお初が得意だつたので、今度徳三郎の襲名興行にも鏡山を出す事になるかも知れないが、その三代目璃寛のお初については、哀れな逸話が残つて



ゐる。

璃寛が萬延元年道頓堀筑後の芝居で、和三郎から初めて徳三郎になつた折の事で、ある日北船場の物持平野屋の一族が、西棧敷の幾つかを買ひ切つて見物に来てゐたが、そのなかに別家の一人娘お常といふのがゐて、徳三郎の優姿を見初めて、顔を杏のやうに赧くした。

それから二月三月して、徳三郎はまた堀江の芝居にかかつた。出し物は鏡山のお初で、大阪中はひつくり返るやうな人氣が立つた。お常はそれを聞くともう立つても居てもゐられなくなつた。お常には許婚の男があつたが、戀をする身には許婚の男などは、文久錢ほどの價値もなかつた。

お常は三十日の芝居を、十八日まで続け様に通ひ詰めたが、どうしても徳三郎と言葉を交はず事が出来なかつた。會つて言葉を交はしたところで、相手が俳優の事だ、食物か京白粉の話でもして、にやつと笑ふくらゐの事しか出来なかつたが、それでもお常はその一言に生命までもと思ひ込んだ。

お常はたうとう戀病に取つ憑かれた。徳三郎のお初の似顔繪を抱いたまま、焦れ死に死に

かかつた。娘の不心得を怒つた両親も、末期の哀れさに、傳手をもとめて徳三郎を招いた。そして末期の水をその手から飲ませると、そのまま息が絶えてしまつた。

今の徳三郎がお初を演るとしたら、どんな事になるだらう。戀女を焦れ死させる代りに、事によつたら劇評家を氣絶させるかも知れない。

## 苦力と料理人

ながく支那にゐて彼國あちらの事情によく通じてゐる加奈陀出身の青年將校が、西部戦線の後方勤務に支那苦力を使つたらといふので、その募集に最近支那へ派遣せられて行つた。

金錢さへ儲かつたら、地獄へでも下りて行くのが支那人の習はしである。手當が良いといふので、苦力は苦もなく集まつた。青年將校はそれを一纏めに船に乗せて、馬耳塞をさして海へ出た。



船が印度洋を通りかかった頃、青年將校は苦力と賄ひ方との間に激しい喧嘩がおつ始まつてゐるのに氣がついた。

賄ひ方は廣東人だった。鷲鳥のやうに口を尖らして我鳴り立ててゐた苦力は、將校の姿を見ると慌ててお辭儀をした。

「旦那、此奴あ怪しからん奴なんです。これから皆で殺してやらうと思つてる所なんです。どうかそこで見てゐて下さい。」

なかの一人はかう言つて肩を聳やかした。

「賄ひ方をやつつけるんだつて。」青年將校は強ひて氣を落ちつけるやうに薄い口髭を引張つた。「それも面白からう。だが、前もつて腹をきめて置かんければならんのは、賄ひ方を殺すと、馬耳塞へ着くまで、お前達は飲まず食はずにゐなければならんぞ。」

それを聞くと、苦力達は驚いたやうに顔を見合はせた。將校は苦力の人夫頭を顎でしゃくつた。

「どうしたつて言ふんだ。賄が良くないつて言ふのかい。」

「いいえ賄は別に悪ありません。」人夫頭は頭を下げた。

「それぢや、賄の分量が足りないとしても言ふのか。」

「いえ賄は十分にありますので。」

「はてな。」將校は小首を傾げた。「ぢや、料理が不味いとしても言ふんだな。」

「いいえ、料理はなかなかうまく出来上つとります。」

「それぢや、なんだつて賄ひ方を殺すなんて騒ぎ立てるんだ。」若い將校は額に痼癢筋をおつ立てた。「馬鹿者めが……」

「はい……」人夫頭は面目なささうに頭へ手をやつた。「なんだつて申しますと、此奴の拵へる料理は、どうもお腹なかに持堪へがなくなつて、すぐ腹が空すいちまふもんですからね。」

賄ひ方の庖丁加減が上手なので、食物の消化が良すぎたのだつた。



新版 茶話全集 上卷 畢

新版 茶話全集 上卷



昭和十七年七月二十日 印刷  
昭和十七年七月廿五日 發行

著者

發行者

印刷者

發行所

薄田泣菫

矢部良策

馬場祐次郎

株式會社 創元社

日本出版文化協會員一二五、五〇一號  
大阪市北區樋上町四五番地  
振替大阪五七〇九九番  
電話北三六八六・三七〇八番

配給元・日本出版配給株式會社

定價 貳圓五拾錢



# 薄田泣菫全集

全八卷

別染布装・函入上製本  
各册共約五百頁・上質紙  
各卷定價二・八〇送料〇・二〇

- |         |      |   |                      |
|---------|------|---|----------------------|
| 第一卷     | 詩    | 篇 | 暮笛集・ゆく春・白玉姫・二十五絃(上)  |
| 第二卷     | 詩    | 篇 | 二十五絃(下)・白羊宮・十字街頭・子守唄 |
| 第三卷     | 隨筆   | 篇 | 茶話(上)                |
| 第四卷     | 隨筆   | 篇 | 茶話(下)                |
| 第五・六・七卷 | 隨筆   | 篇 | 艸木蟲魚・獨樂園・猫の微笑・その他    |
| 第八卷     | 創作童話 | 篇 | 鷺草・その他               |

## わが近代詩精神の先驅

小林 秀雄

西洋近代詩の發想の本質的な複雑さの輸入は「泣菫有明時代」によつて開かれた。その點泣菫氏は現代詩人達が理解してゐる詩といふものゝ元祖であり、西洋近代詩精神がわが國でどれほど育て難いものであるかを、體驗した最初の詩人であつた。この困難を自覺するに足る薄田氏の様な才能ある詩魂は、まことに稀有であると云つた方がよゝ。

## 教養の最高限度

岡本 かの子

その詩風は日本の古謡古詞の巧な復活の中に、羅典風な感觸がある。滋美で格調が正しく、しかも大らかで、これこそ、眞の藝術の魅力と思はれる。詩に代つて現はれた隨筆には、およそ人間の教養の限度を示すかのやうに、人生のあらゆる部門の觀察批判、紹介が多く事物に興味に即して語られた。また、そこに典雅優麗な文體が、枯淡と洒脫の圓熟を加へて示されてゐる。



# 横光利一集

【全七卷】

長篇小説

春

四六判三五二頁 定價一・一五〇 送料一・一五〇

園

武藏野の奥にそれらの運命と心をもつた諸人物を登場させ、それらが著者に代つて日本の自然、感情、道義と云ふやうなものを見出さうと試み、その目的は全體の空氣が醸し出す情感のうちに見事に遂げられてゐる。

長篇小説

家族會議

四六判四五〇頁 定價一・一八〇 送料一・一五〇

横光氏はわが國の情操の傳統と西歐の近代的思想との間に立つて全く獨創的な手法をとつた野心的な作家である。これは氏が近松の世話物にも匹敵する構想の妙、文藻の美を心ゆくまで發揮した逸品である。

長篇小説

天使

四六判四一六頁 定價一・一五〇 送料一・一五〇

最も活潑な思考を最も眞摯な手法とによつて現代生活を見事に裁斷し批評したこの長篇は、一見背徳の書のやうにも見えるけれども、著者の人間慈愛の眼は、作品の基底に一貫した精神の光を投げてゐる。

長篇小説  
時計

B六判三七〇頁 定價一・一六〇 送料一・一五〇

智的頹廢に陥つた現代青年男女の複雑多岐な戀愛心理を浮彫にして、これほど迫眞性を示したものは無いと云はれる。これは「紋章」とともに横光氏の最大傑作であり、純粹小説の先驅的な殆ど唯一の實現であつた。

歐洲紀行

B六判三七八頁 定價一・一八〇 寫眞三十數葉 送料一・一五〇

ヨーロッパの知性の混亂に接し却つて東洋的精神に新しい文化の温床を見出した氏は、外遊を契機として著しい變貌を遂げた。本書はその過程に於ける氏の貴重な記録であり、新しき發足の序曲として必讀さるべき書。

考へる葦

B六判三二〇頁 定價一・一五〇 送料一・一五〇

本書には氏の小説、感想、日記、隨筆、紀行、講演等の近業の殆ど凡てを収録した。これら氏の諸々の發想の契機を成すものは、世界史上にたぐひ稀なる現代の激しい動亂であつて、本書の持つ時代的意義は極めて大きい。

短篇集

B六判三八〇頁 定價一・一七〇 送料一・一五〇

氏の最高潮に達した作家精神の規約と圖式が、遺憾なくうかゞはれる代表的な短篇を蒐めてこの一卷とした。何れも發表當時世論を喚起した問題作である。内容機械、歴史、時間、薔薇、鳥、書簡、惡魔、鞭、馬車、其の他。

日本圖書館協會推薦



横光利一著

鶏園

B六判二六〇頁 定價一・八〇  
佐野繁次郎裝 送料一・一五

作家としていよ／＼圓熟の境に達した著者近來の傑作である。人間の調和が變化すること、新たな調和を必要とする苦痛の主題をとらへ、人間への愛情と信頼とを流露した云はゞ運命の曲である。

川端康成著

雪國

B六判上製 定價一・七〇  
送料一・二〇

雪國は、川端氏がその藝術的完璧を示した小説である。自己の資質の底からにちみ出すやうに歌ひ上げた一篇の抒情——作者の感覺と情緒とは、新しい氷を得た魚のやうにいさ／＼と冴えくる。類ひ稀なる絶品である。

阿部知二著

旅人

規格判A五 定價一・八〇  
送料一・一五

小説「旅人」は旅びとと云ふ言葉のもつ象徴的な雰囲気、一人の美しい女の上に再現し、現實の厳しさの中になほ夢を追はずにはゐられない人間性の美しさを描いた心優しい物語である。

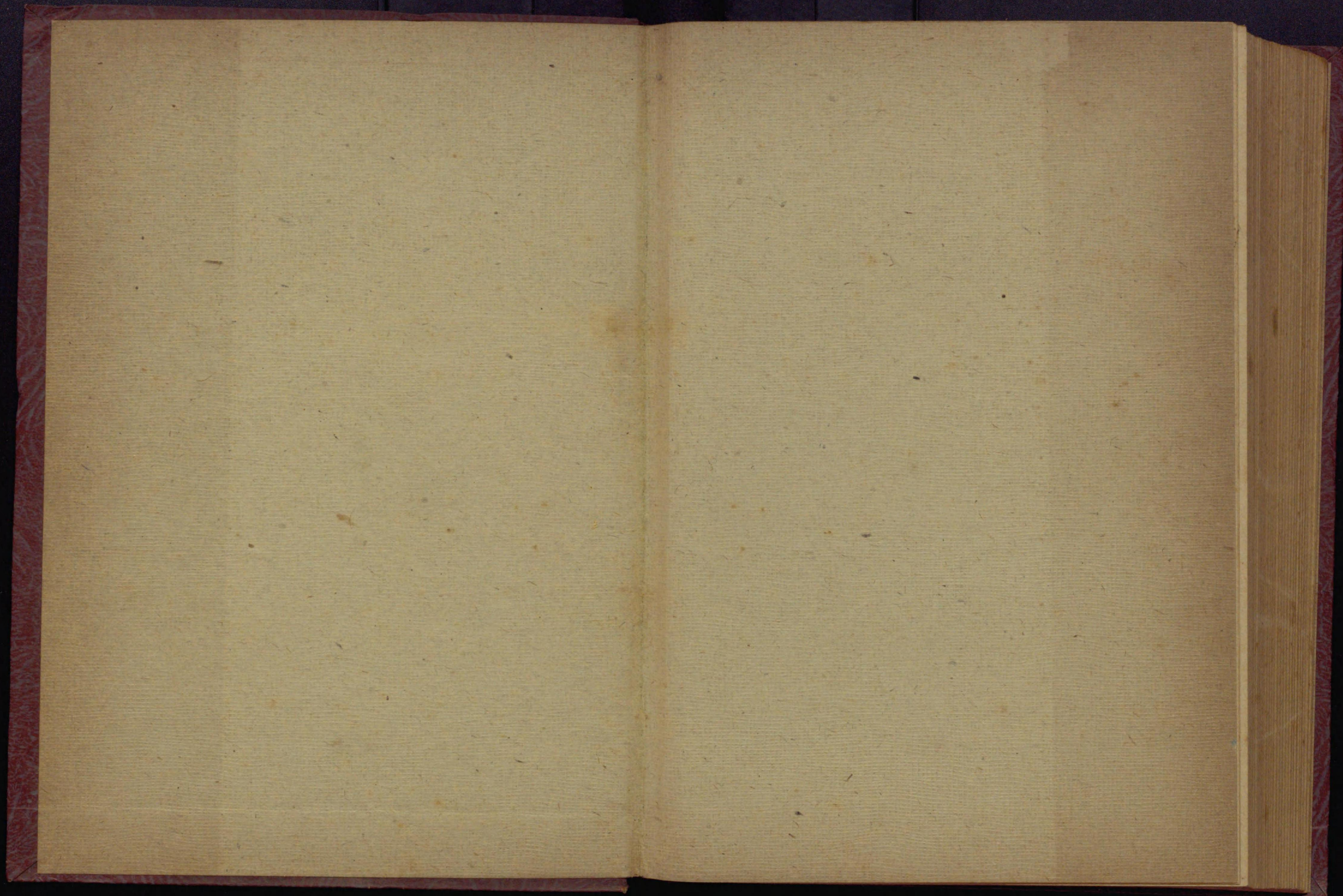
三好達治著

一點鐘

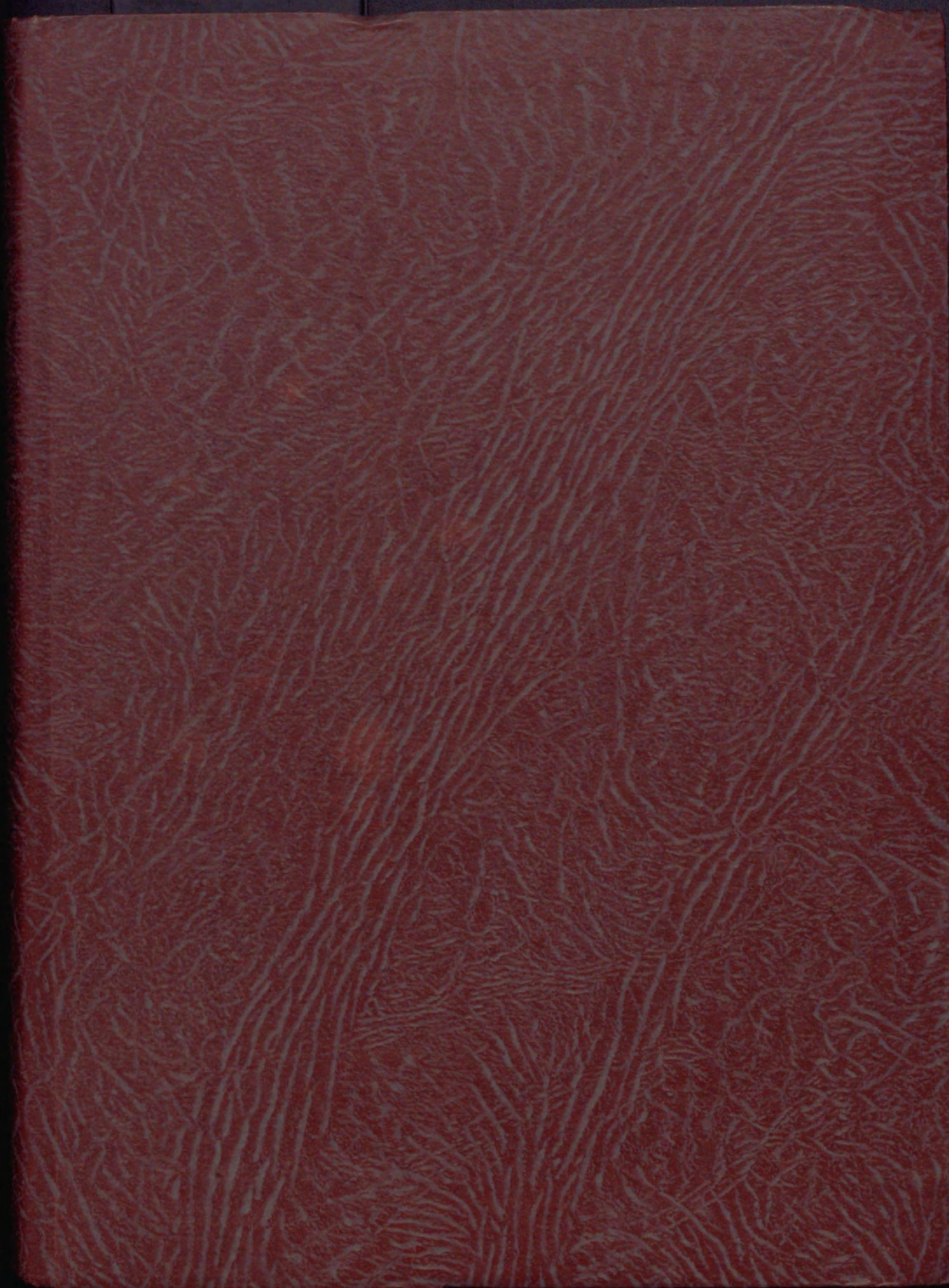
和本仕立 定價二・〇〇  
高雅裝 送料一・二〇

氏は昆蟲の中にあれば一層その光芒を増すと云ふ體の詩人である。こゝに集めた氏の近作は、いづれも典雅な格調、日本語傳統の美しさをたゞへた逸作ばかりで「詩」の魅力が豊かに湛へ、讀むものの心に沁みこんでくる。









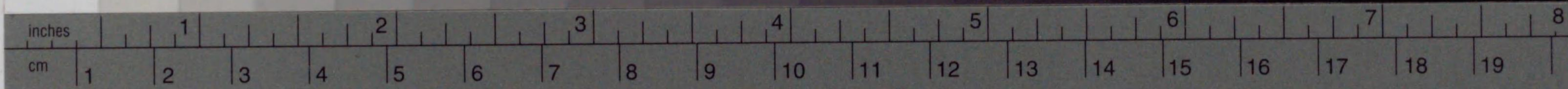


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

